

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies

(巻 / Volume)

16

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

175

(終了ページ / End Page)

221

(発行年 / Year)

2019-03

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を推進するために、学生が主体となって企画・運営するさまざまな活動に対して助成を行う制度である。本年度は12件の申請があり、書類の記載上の瑕疵等により若干の減額が生じたケースが数件あったものの、すべてのプログラムが助成の対象として認められた。

申請された活動の内容は多岐にわたり、すべてのプログラムを合わせると、キャリアデザイン学部を構成する3つの領域、すなわち発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリアのすべてが含まれるものとなった。以下に各々の活動の成果報告を掲載する。

学生たちには、このような活動を通して、「キャリア」や「キャリアデザイン」について考察や理解を深めていくこと、および、公的な助成金を活用して活動を企画・実行することの意義や責任を学ぶことを期待している。今後も多くの団体から、キャリアデザインの視点から、社会的に意義のある企画が生まれ、応募されることが望まれる。

なお、本プログラムの助成は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。当学会の運営にご協力いただいているすべての方々に感謝を申し上げたい。

(学生サポート委員長 木村琢磨)

市町村合併による佐渡市の文化行政（博物館・資料館等）に関する調査

代表者：金山ゼミ 青木めぐみ

1 実施概要

私たちは、新潟県佐渡市の調査を行った。佐渡市は平成の大合併の際、合併することを選択した地域である。合併を機に佐渡市内では、市内にある文化施設の統廃合を行った。今回の調査を通じ、私たちは合併という行政の動きが文化行政にどのような影響を与えるかを明らかにすることにした。

フィールドワークでは実際に博物館がどのような状態で運営を行っているのか館内を見学しながら確認した。見学では、運営状況だけでなく、展示も見学し佐渡市の歴史や伝統についても学んだ。また、歴史的景観を残す宿根木にも足を運び、景観保存や観光化の実態についても調査を行った。合宿最終日には、佐渡学関係者の方から合併へ至った経緯や、博物館の統廃合について説明を受けながら、博物館見学を通じ感じたことなどの意見交換を行い、市町村合併が文化行政や住民に与えた影響についての理解を深めた。

報告書では、①文化施設の再編の影響（両津郷土博物館と新穂歴史民俗資料館を事例に）、②宿根木の景観保存・住民生活 ③佐渡学センターの役割の3つにテーマを絞り、佐渡市合併が文化行政に与えた影響を考察し、編集を行う。

- ・ 日程 2018年8月1日(水)から4日(土)
3泊4日

8月1日(水)

佐渡学センター 職員から合併前後の博物館・資料館についての概要説明

8月2日(木)

相川郷土博物館 現地調査(職員同行)
史跡佐渡金山 現地調査(職員同行)
両津郷土博物館 現地調査(職員同行)
新穂歴史民俗資料館 現地調査(職員同行)

8月3日(金)

赤泊郷土資料館 現地調査(職員同行)
佐渡国小木民俗資料館・千石船展示館
現地調査(職員同行)

8月4日(土)

佐渡学センター 職員との意見交換

- ・ 報告書作成

2019年1月10日(木)

調査をふまえ、佐渡市の現状と今後の展望について考察し、報告書としてまとめた。

報告書の印刷、製本を行った。

- ・ 報告書原稿担当

統括 石津隆希
編集 若山優希
佐渡市概要 荒川洋陽
博物館概要 青木めぐみ
ヒアリング 田島美咲
考察1 仲浦さくら

考察2 飯島かれん
 考察3 木内工実

- ・ 報告書提出
 2019年2月（中旬）
 調査でお世話になった佐渡学センターに提出する。
 郵送で提出する予定である。
- ・ その他
 フィールドワークの事前準備として、まちづくりをテーマとしたテキスト批評を行った。テキスト批評では少子高齢化などの様々な問題を抱える地方行政がどのようなまちづくりを行っているのか、今後どのようなまちづくり政策を打ち出して行くべきかをゼミ生同士で意見を出し合うことで、各々まちづくりに対する思考や理解を深めフィールドワークに臨んだ。
 調査報告書作成に向け、ワークショップを行い、フィールドワークで得た情報の共有、佐渡学センターの今後の展望について考察した。
 調査報告書の作成と同時に、発表用のパワーポイントの作成を行った。

2 結果・意義・所見

【佐渡市の文化行政について】

佐渡市は、2004（平成16）年3月に、島内の両津市をはじめとする10市町村が合併しできた自治体である。

合併後、旧市町村に点在していた博物館等の文化施設は、統廃合することが検討されるようになった。また、当時の市長が佐渡伝統文化研究所の設置を提唱したことにより、教育委員会生涯学習課に準備室が設けられることとなる。平成19年に正式に伝統文化研究所が設立される。平成21年に伝

統文化研究所から「佐渡学センター」に名称が変更された。現在、佐渡学センターでは休館中の博物館を含め、15館の博物館管理を行っている。

【文化施設の再編】

佐渡市合併後に行われた文化施設の再編が行われた。その際、新穂歴史民俗資料館と両津郷土博物館も統廃合の対象として名前が挙げられていた博物館である。しかし、この2つの博物館は現在も存続、運営されている博物館である。

○新穂歴史民俗資料館

佐渡市合併後、文化施設の統廃合を行うことになった際、新穂歴史民俗資料館も廃館の対象となった。しかし、住民たちの反対意見や「廃館にするくらいならば自分たちで運営する」という声があり、現在は住民の手で運営されている。

当資料館は、新穂地域で伝わる説教人形やのろま人形の展示を行っている。住民からの意見によって運営されているため、住民が織物体験やイベントを開催しており、地域住民が集まるコミュニティスペースとしての役割も担っていると考えられる。このことから、新穂地域の住民は、合併以前から当資料館との結びつきが強く、資料に対する愛着もあるということが分かる。今後、イベント数を増やすことで、市民の関心を更に高め、住民同士のつながりを強める場としても活躍していくことが期待される。

博物館運営に関しては、キャプションやパネル展示が不足しているという印象を受けた。また、展示資料と一緒にお供え物のお菓子が置かれているなど、資料保存の観点から不安が残る。住民が運営しているため、資料の保存研究に関する知識を持つ人のサポートが必要であると考えられる。

○両津郷土博物館

両津郷土博物館は、広大な土地と広い展示室を有する博物館であるが、高額な維持費がかかることから廃館の対象となった。しかし、約3万点の資料を収蔵する当博物館を廃館とした後の資料をどの施設が引き受けるのが争点となり、維持費を抑えるため、休館という選択をとった。

新穂歴史民俗資料館と同じ廃館の対象になった当博物館であるが、廃館に対する反対意見はなかったという。旧両津市は、合併以前の佐渡島内で一番大きな地域であったため、旧新穂村に比べ地域住民同士や博物館の結びつきが薄かったのではないかと考えられる。

展示内容としては、大きな展示室を利用して3つのテーマに分けた展示を行っている。約3万点の資料は現在も博物館の裏にある収蔵庫に保管されている。休館状況であるため、空調設備なども動いておらず資料保存の観点から考えると展示室、収蔵庫ともに資料保存に適切な環境ではないと言える。当博物館は、資料保存管理と施設運用に関して課題がまだ残る博物館であるといえる。

【宿根木の景観保存・住民生活】

宿根木は、100棟を超える板壁の民家が密集しており、国の重要伝統的建造物保存地区に指定された集落である。現在は、高齢化のため住民が少なくなり空き家の増加という課題を抱えている。ヒアリングによると、三角家の公開を始めた2012(平成24)年頃から大型バスでの観光ツアー客が訪れるようになり、宿根木の観光客を取り込もうという動きが強くなってきている。

見学を通じ、宿根木の町並みと住民が分離してしまい、住民たちの生活感が感じられないという印象を受けた。ヒアリングによると、宿根木の景観保存に積極的な人と、保存にあまり関心がない人が存在しており、

関心のない人々は自身の生活を維持することを優先しており、まちづくりには関わらないのだという。そのため、景観保存に積極的な人々による観光地としての振興事業が進み、町並みと住民の生活が分離してしまったのだと考える。

そこで今後、さらなる人口減少が予想される宿根木の生活を維持するために、私たちは、移住者の受け入れを提案する。現在、宿根木では移住者の受け入れを積極的には行っておらず、昔から宿根木に住む人々で生活をしている。そこで、宿根木の景観やまちづくりに関心のある人の移住を受け入れることで、まちづくりに取り組んでもらおうと考えた。外部からの新しい視点を取り入れたまちづくりは、宿根木の景観保存だけでなく、生活面での活性化も期待される。また、移住者に空き家を提供し、そこで生活してもらうことで、町並みと生活感の分離という課題の解決につながっていくのではないかと考えた。移住者を受け入れ当事者意識のあるまちづくりを進めることで、宿根木が、歴史的景観や住民の生活が融合した地域として発展していくことに期待する。

【佐渡学センターの現状と今後の展望】

佐渡学センターは、佐渡市内の博物館の管理運営と市内の資料調査研究を行うために設置された機関であるが、現在その機能を十分に果たせていないのではないかとこの疑問を持った。関係者の方との意見交換の際にも、新穂歴史民俗資料館を含む佐渡市内の15施設は学芸員2名、臨時職員1名で管理運営している状況であり、すべての博物館に手がまわらないというのが現状である。また、旧市町村の住民たちの「自分たちの地域で集めた資料は自分たちの地域のものである」という地域アイデンティティの意識が強く残されているため、センター

による資料研究が進められていない。しかし、合併することによって、文化施設の整理統合が求められているだけでなく、金山の世界遺産認定に向けても文化行政の現状を改革していく必要がある。そのためにも各地域の連携が取れるようにすることが欠かせない。佐渡市民としてのアイデンティティ形成、課題解決に向けた官民一体となる仕組み作りが求められる。

【最後に】

今回のフィールドワークで私たちは、実際に佐渡市を訪れ博物館を見学することで、佐渡市の文化施設の運営状況を知ることができた。また、合併による文化施設の統廃合に伴う、博物館の管理運営がどのような状況であるのかを理解し、合併という行政の動きが文化施設の運営や市民にどのような影響を与えたのかを知ることができた。

人生 100年時代のキャリアシフトに関する インタラクティブ・ラーニング

代表者：田中ゼミ 石松木実

1 実施概要

本企画では、過去現在をもとに未来を考えながら「人生 100年時代のキャリアシフト」をテーマに、参加者とゲストスピーカーとのインタラクティブ・ラーニングセッションを行なった。実社会の最先端で活躍されているゲストを招聘し、生きた経験を直接お会いし、質問中心のセッションから深掘りしていった。

- ①時代の最先端で活躍なさっている方々をゲストスピーカーとして招聘する。セッションから実社会の流れを肌感覚で感じ、インプットする機会を作る。
- ②学生主体のワークショップを開催。ゲストスピーカーのお話から得たことや各個人がインターンシップなどの学外での学びをアウトプットする機会を作る。またゼミ外の学生、他学部・他大学の学生、本学部 OB・OG が積極的に参加できるようにし、オープンに開催する。多様な考えを持った人々と交流することで、より多角的に視野を持つ。
- ③本企画は、インプットとアウトプットのバランスを取りながら、インタラクティブ・ラーニング形式で、これからの時代を生き抜く知識を身につけ、新たな時代に立ち向かっていく素養を身につける環境を作り出していくことを狙いとする。

上記三点を学習目標として、田中ゼミメンバーが中心となり、企画運営を行なった。企画告知、ゲスト講師への連絡、当日のア

テンド、司会進行までに従事した。学習目標に達成のため、創意工夫しながら、各回の講義を作り上げた。多くのゼミ生が企画運営に携わることにより、より深い学びを構築することに繋がった。

実施期日と内容

- | | |
|--------|---|
| 6月13日 | モチベーション革命
(企画運営：石松木実 早迫慶佳 松尾和哉 山下貴史)
尾原 和啓 IT 批評家 |
| 6月20日 | 財務諸表分析から学ぶ企業の見方
(企画運営：熊井修也 野崎隼平 佐藤帆夏 椿七海)
水戸 政和 株式会社日本創生投資 代表取締役 |
| 6月27日 | 最先端技術を生かした金融のあり方
(企画運営：工藤純平 大溝いまり 森千晶 宮内龍汰)
上原 高志 Japan Digital Design 株式会社 CEO |
| 10月10日 | 海外で活躍する日本人
(企画運営：岸本磨美 高橋ひとみ 若宮有紀 森田怜奈)
松崎 冬華 DMM.Kenya |
| 10月17日 | 地方創生から見るキャリアデザイン |

(企画運営：工藤純平 大溝い
まり 森千晶 宮内龍汰)
山田 崇 長野県塩尻市役所公
務員

フトに関するインタラクティ
ブ・ラーニング
岡村 紘子 (株) グローバル・
カルテット

10月23日 人生100年時代の女性の働き
方
(企画運営：田村真土香 片島
梨紗 若宮有紀 椿七海)
菊間 千乃 弁護士法人松尾綜
合法律事務所

各回の企画運営担当者が準備段階から当
日の運営まで全てを担った。

既に運営経験のある者が未経験の者にア
ドバイスを送るなど、より円滑で満足度の
高い会とするために担当以外の者も含めた
全員で毎回の講演を作り上げた。

11月14日 仕事2.0
(企画運営：石松木実 早迫慶
佳 松尾和哉 山下貴史)
佐藤 留美 NewsPicks 副編集
長

2 結果・意義・所見

学生が講演会の全てを取り仕切った。ア
ポイントの取り方や司会進行の術、社会人
とのコミュニケーションの取り方など実社
会で生きるスキルが身についた。これは主
体的に取り組んだことで得られた、ただ聴
講するだけでは得られないプラスアルファ
の学びであると感じている。また、毎回の
講演でインプットした内容をアウトプット
まで繋げた。例えば、ソーシャルメディア
のNOTEに内容をまとめたり、SNSに振り
返りを投稿したりという形でアウトプット
した。ゼミメンバー個人単位の活動におい
ては、講演内容からインターンやビジネス
コンテストにおけるヒントを得て、実践的
なアウトプットまで繋げたものも多かった。

11月21日 才能の正体
(企画運営：熊井修也 野崎隼
平 若宮有紀 椿七海)
坪田 信貴 「才能の正体」著者
須藤 憲司 KaizenPlatform
CEO

ゼミメンバーだけでなく、他のゼミ生、
他学部、他大学、高校生から社会人まで、
より多くの方に参加頂き、運営をしていく
ことが出来た。所属に関わらず、何かを学
び取ろうという点において壁はなく、年齢
の幅を超えて学ぶことが出来た。自分たち
のコミュニティではなかった価値観を教え
てくれるなど交流の範囲が広がった。また、
前述のようにいろんな方々に参加して頂く
ために、SNSを使ったPR活動を行なった。
企画運営の学生も、どれだけの人を集める

12月5日 激動時代を生き抜く信条
(企画運営：岸本磨美 高橋ひ
とみ 工藤純平 森田怜奈)
星本 祐佳 ユースター株式会
社 CEO
向畑 憲良 GMOMakeShop
CEO

12月12日 働く女子と罪悪感
(企画運営：石松木実 早迫慶
佳 松尾和哉 山下貴史)
浜田 敬子 Business insider
編集長

通年 人生100年時代のキャリアシ

ことが出来たかを一つの指標としながら、広報についても学ぶことが出来た。「来てよかった」と言われることに満足感を感じ、またそう言われるように、企画運営を妥協せず、綿密に考え抜いた。

招聘するゲストについては、様々な分野で活躍されている方をお招きし、性別、職種等異なる方にお声掛けするよう心がけた。バックグラウンドの異なる多種多様な方の生きた経験、考えを聞くことで、学生だけでは知ることのできない社会の広さや奥深さを学ぶことが出来、また新たな価値観を見出した。その中で、役職、企業、経験の全く異なる方々が、一貫して重要性を強調していったこともあった。それはまず、歩目を切り開くこと、挑戦することである。「好きなことだけをしたい」というのは誰しもが思い描く理想であるが、まだ経験、知識共に薄い学生は、食わず嫌いをせず、とりあえずやってみることが重要であるとのことであった。なぜなら、やりたいことと得意なことは必ずしも一致せず、とりあえずやってみることで、今まで感じたことのない面白さや得意分野がみえてくることがあるからだという。こういった考え方は、書籍やインターネット上のインタビュー記事で、散見されることではあるが、実際にお会いして生の声でお話を聞くことによって、私たちの中で、より具体化され、取り組みを加速させる。このような学びのチェーンを作ることが出来たという点で、今回の活動は大変意義深いものであると感じている。

また、ゲストの方にどれだけ満足して頂けるかも重要視した。お忙しい中の時間を頂戴してお越しいただいてる中で、一分足りとも無駄させてはいけな思考え、運営上の不備がないか入念に確認した。ゲストが学生にギブするだけでなく、学生からもギブし、お互いに新たな価値を得られるよ

うにと考えた。聴講者含めた全員がゲストの経歴や著書、記事から予め質問を用意し、学生側の考えていることや等身大の悩みを伝えた。そうすることで、ゲストは今の学生の考えを知ることが出来、お互いに価値のある時間を送ることが出来た。ゲストの方から「自分が学生の時にこんなゼミがあればよかった」といってもらえることも多く、大変満足度の高いセッションを構築することが出来た。また、講演後の関係性も大切にしたい。お礼の連絡をするのは当然であるが、その後個人単位で関係性を深化させ、別日にお会いしたり、企業に訪問したりするなど当日だけに関係を終わらせず、今後社会に出てからも関係性を持てるように心がけた。

最後に本活動を通して得た知見を2つにまとめる。

- ①「継続は力になり、最重要課題である」ということである。仕事で着実に成果を出していくことは、まぐれや運ではないことをあらためて痛感した。どのゲストも、一つ一つ目の前の仕事に丁寧に向き合っている。そうした積み重ねが、大きな成果を生み出している。
- ②「他者目線の重要性」である。どのゲストの方も、学生である私たちからの連絡一つとってみても、丁寧に返信をくださった。また、迅速かつ的確であることも印象に残った。私たち学生はどうしても、友人関係の上で甘えたコミュニケーションをとりがちである。返信が遅れたり、曖昧な態度をとることなどである。本企画を通じて、社会で働く上で大事な働く姿勢を身につけることができた。

この学びはこの活動にとどめず、将来にわたって活用していく。また、来年度以降も引き続きこの環境を継続、発展させていくべく全メンバーで行動していく。

ブリッジワンスタディサポート

ブリッジワンスタディサポート 大久保遥

1 実施概要

本校キャリアデザイン学部を中心とした学生が、昼休みと放課後の時間を利用し高校生との交流、居場所づくりをしている。対象校は、都立一橋高等学校である。高校のテスト期間や学校行事等を除いた毎週月曜～金曜日の12:10～13:30および16:15～17:25、3階309教室を使用して活動を行った。

1学期 活動実施日

日程 2018年4月26日～7月2日

・7月20日 1学期反省会

今年の3月にブリッジワンスタディサポート（以下、ブリワン）によく訪れていた生徒たちが卒業した。コアメンバーがいなくなったことで活気がなくなるのではないかと感じる面もあったが、そのような心配はなく以前より生徒間でコミュニケーションをとる機会も増えたように感じる。今年ブリワンに訪れている最上級生は大学進学ではなく就職を選んだ生徒が多いため、昨年度のように1対1で勉強を教える機会は少ない。先生でも保護者でもないナナメの関係である大学生が、1人1人との対話を大切に活動しているからこそ、就職を控えた生徒たちのストレスや揺れ動く感情の変化にも気づくことができた。1つのシフトに最低2人は大学生が入ることによって、個別対応が必要な生徒へのアプローチも行えている。その中で、複雑な人間関係を背景に、内面

に抱えたつらさや構ってほしい気持ちを前面に出すリストカットやオーバードーズを始めようとする子への対応も目立ったと感じている。このようなしんどさを抱えた生徒については、職員室へ相談に行くかメンバーのみが閲覧できるウェブ上のグループにて報告するなど情報共有を図っている。

また、今学期の反省会では曜日によって生徒の来室数に偏りがみられるとの報告があったため、広報活動に力をいれていく方向でまとまった。これはゼミ活動や履修状況によって、ブリワンに参加している大学生が水曜夕方や木曜昼・夕方シフトに入りづらくなっていることも原因としてあるだろう。生徒に対してはホームルーム中の1年生の教室にお邪魔し勧誘活動を行い、大学生に関しては同級生や1年生への勧誘で新メンバーを増やしていくこととなった。来学期はこれらの実行に向けて動き出す予定だ。

2学期 活動実施日

日程 2018年9月11日～12月3日

・9月12日、13日 新入生勧誘活動

・9月28日、29日 一橋高校文化祭

・12月17日、19日 2学期反省会

はじめに、新入生勧誘活動について報告する。新規利用者獲得のため、1年生の教室にてチラシ配布と活動紹介をさせていただいた。チラシには、活動日時や概要、ブリワンに参加している全学生の顔写真を載せて認知度が高まるような工夫を行った。各

教室を学生が回っていくことで、1年生と対面することができる。そこで、生徒が抱いたブリワンに関する疑問も解決できるため、有意義な時間だったと感じる。全体に向けての説明が終了したあと、反応を見せていた生徒に声をかけてみると「今度行ってみる」との返答ももらえた。実際に、「チラシを見た」と言って来室してくれた生徒もいたため、一定の効果はあったと感じる。今後は利用を定着させていくため、生徒と廊下ですれ違った際の声かけや勧誘活動を継続していく必要がある。

次に一橋高校文化祭についてである。毎年、1教室をお借りしてブリワンの活動を学校内外へ広めるために企画を行わせていただいている。昨年は、タロット占いとUNO大会の企画・運営、景品づくりを学生主体で行っていた。それに対し、今年は3年生の女子生徒の提案によって、折鶴のピアス・イヤリングを景品として作成することになった。高校の廊下に掲示するPRボードも、ブリワンを担当して下さっている美術科の先生とともに生徒たちが作成してくれた。大学生が一方的に関わるのではなく、少しずつ生徒の「やりたいこと」「得意なこと」を伸ばせる場となっている。文化祭当日は、宝探しゲームを行い、教室に隠した付箋を見つけたら景品がもらえるという流れである。参加者は一橋高校の生徒から親御さんなど様々な層が訪れた。加えて、ブリワンの卒業生も遊びに来るなど、高校生のタテのつながりも盛んに行われていた。

3学期 活動実施日

日程 2019年1月9日～2月20日

- ・3月15日 ブリッジワンスタディサポート卒業式および3学期反省会

職員室に立ち寄ると、ブリワン利用者の担任の先生が、「〇〇くんはブリワンに顔を

出していますか。新作の小説を書き上げたそうなので声をかけてあげてください。」などと話しかけてくれる機会がある。ブリワンと一橋高校の橋渡しを担当して下さっている先生以外にも、広く活動が周知されてきていることを実感している。高校の先生たちと大学生につながりがあると、ある生徒のことで相談したいと思った際すぐに声掛けすることができる。生徒との交流のみならず先生たちともコミュニケーションを図っていく必要がある。

3学期には、今年度一橋高校を卒業する生徒たちを祝うために卒業式を実施する。現在は、活動時に学年問わず声かけを行い3月15日にイベントを行うことを宣伝している状況だ。加えて、毎年卒業式などのイベントを開催できるように、昨年中心となり企画・運営を行った学生が後輩に引継ぎを行っている。当日行う企画内容については、まだ構想段階である。生徒の要望に応えられるよう、ブリワン活動中に話し合いながら計画を立てていきたい。

2 結果・意義・所見

本企画による結果として大きく4つの発見があったため、以下はそれらについて述べていきたい。

1. 一橋高校文化祭について

はじめに、9月28日・29日の一橋高校文化祭への参加によって得られた結果とその意義について考察していく。ブリワン参加者の中でも、就職活動やテスト勉強などで多忙な3年生が精力的に文化祭準備・運営に関わる姿が見られた。普段の活動時は、何か行動するにあたって、面倒くさかったり気が向かないと集中できなかつたりする傾向にある。「えー」「めんどくさい」「眠い」という言葉が最初に出て、やりとりを重ね

るも「〇〇（他の生徒の名前）がやってよ」となるパターンが見られるのだ。手先が器用な生徒が多く、学生がその点に注目すると嬉しそうな顔をする一方で、自分から作品を紹介するなど自己アピールが苦手なことが要因の1つとして挙げられるだろう。

今回は、ブリワンの活動時に1人の生徒が自宅で作成しているハンドメイドアクセサリーの写真を見せてくれたことから、文化祭の景品として作成し来場者にプレゼントする流れがうまく、生徒の「成果発表の場」を設けることができた。これは、生徒たちの性格や学校生活での様子を把握している先生方からも生徒に対する声かけをしていただいたことで、実現にむけた一歩が踏み出せたと感じている。3年生になると、部活動も引退を迎え好きなことや得意なことに打ち込む機会が減少する。加えてブリワンに来室する生徒の特徴として、学校に来ることに消極的な気持ちを抱いている子がおり、所属コミュニティの数も少ない。そのような生徒たちに自分の個性を伸長できる空間を提供できたことは、非常に価値があっただろう。

2. 勧誘活動について

次は、9月12日・13日に実施した新入生勧誘活動についてである。

昨年度、ブリワンのコアメンバーであった最上級生が高校を卒業したことにより、参加人数の減少が見られたため、1学期の反省を生かし勧誘活動を行なった。以前から、1階のロビーにある掲示板をお借りしブリワンメンバーの自己紹介カードを掲示したり309教室の廊下側掲示板に学期ごとのシフト表を貼ったりしていた。しかし、この活動に参加することでどのようなメリットがあるのか、何ができるのかを明確に生徒へ伝えられていなかったと推測できる。そのため、今回はホームルーム中の教室にて勧

誘活動を行わせていただいたことは、1年生と対話し学生の生の声を届けられたという点で有意義であった。生徒側からのメリットとして、活動に関する疑問を担当の先生ではなく実際に活動を行っている学生に投げかけることができる。教室に入ったらどのような人が対応してくれるのかを事前に知れることは、入室前後の不安を取り除くことにもつながるだろう。

課題としては、新規参加者の定着である。高校の新学期が始まった9月上旬に勧誘を行い、その後1ヶ月ほど来室していたのだが、10月に入ると足が途絶えてしまっている。これは、私たちが活動毎にウェブ上の非公開グループで行なっている活動報告をexcelに転記した学期毎の生徒来室数データから明らかになっている。それを踏まえた改善点として、活動時に購入したウェルカムボードを廊下において学生が在室していることを示すことである。また、廊下を適宜巡回して声かけを行ったり教室のドアを前後とも開けておいたりすることで、入室しやすい環境を整える必要もあるだろう。活動報告や3学期の反省会の際に他学生へ共有を図り、来年度に向けて実施していきたい。

3. 生徒間のつながり

第3は、本活動全体を通して得られた生徒間同士でのつながりについてである。

前項で述べたように、本企画は我々大学生が都立一橋高等学校の生徒に声掛けをはじめとした積極的な働きかけをし、交流を深めていく中で様々な支援を行う活動である。そのためか、大学生からの一方向的な関わりに偏り、昨年度の反省点として高校生同士のつながりの希薄さを指摘していた。しかし、今年度の活動では、今まで以上の生徒間のつながりの深さを発見することができた。この発見は、前年度の反省を十分に反映することができた結果であると言え、

さらに、この企画で当初期待できるとした効果の「生徒のコミュニケーション能力の向上」が実際に身につけられたことを意味している。

今年度の参加者は主に女子生徒が中心となり、我々大学生の介入なしでもスムーズなコミュニケーションのやり取りを行っていたことが特徴として挙げられる。クラスや学年が全く違う彼女たちであったが、ブリワンを通して距離が縮まり、互いに心の支えとなっていたようだった。このことから、他学年生との交流が広まったことがわかり、さらに深いつながりにまで発展したことで高校生同士のコミュニティが広がったことも効果として明らかになっているため、本企画は有意義であり、価値があったものだと言えるだろう。

4. 本活動における男女比について

最後に、本活動における男女比について述べたい。

今年度の本活動では、前項「生徒間のつながり」で述べたように、非常に女子生徒の参加率が高かったことが結果として挙げられる。このことによるメリットは、繰り返しであるが、生徒同士のつながりが深まったことだろう。しかし、デメリットも存在していたため、ここでは特に目立った2点について考察していきたい。

1つ目は、女子特有のグループ化についてである。ブリワンメンバーとして、昼休みに弁当をもって教室に入室し、同じメンバーで席についてご飯を食べる。この状態は至って普通の高校生の昼休みの風景であるが、

本活動ではあまり好ましくなかったのではないだろうか。教室は基本的に扉を開けたままの状態、誰がいつ入ってきてても良いようにしているのだが、新規で参加したいと考える生徒がその状況を見た場合、入りづらい状況ととらえてしまうだろう。誰でも参加することのできる環境づくりをするためには、今後の工夫がかなり必要であり、この点を改善することができれば、新規参加者の定着にもつながると考える。

2つ目は、男女比の偏りによる弊害についてである。今年度は女子生徒が多かったために、いわゆる「ガールズトーク」で盛り上がり、甲高い声で笑い声を挙げたりする場面が見受けられた。楽しむ場としてブリワンが位置づけられ、生徒の居場所の人になってきたこと自体は非常に望ましいことである。その一方で、参加者の多様性とニーズに答えられていなかった点が課題である。本活動に参加する男子高校生の一部には感覚過敏気味な子がおり、その生徒たちからすれば居心地が悪かった可能性がある。そのため、廊下ですれ違い、声をかけても「今日はいいや」と参加を拒否されてしまうことが報告として挙げられていた。さらに、高校生となると思春期の年頃であるため性的な興味も徐々に出てくるが、その興味に対して対処することへの難しさを異性の大学生スタッフが感じるが多かった。勧誘活動は高校生に対して行うことももちろん大切ではあるが、男女比が均等となるよう大学生に対しても積極的な参加を促す必要があると考える。

企業とのマーケティング事業における活性化

代表者：酒井ゼミ 細井友里加

1 実施概要

【カシオ・マーケティング・アドバンス】実施概要

5月9日

カシオ・マーケティング・アドバンス株式会社 訪問

…顔合わせや今後の活動についての打ち合わせ

5月30日

カシオ・マーケティング・アドバンス株式会社 訪問

…カシオ製品を活用した施策についての打ち合わせ

6月20日

法政大学富士見坂校舎にてメンバー間での施策 打ち合わせ

…PROTREK Smart WSD-F20を活用しながら施策を実践していく方針へ

10月12日

カシオ・マーケティング・アドバンス株式会社 訪問

…ECサイトの撮影の為 FR カメラを活用する事となり、拝借

10月13日

法政大学ボート部（戸田オリンピックボートコースにて） ヒアリング調査

…ECサイトのレビュー掲載の為、法政大学ボート部の方々に協力を依頼

実際に練習風景を撮影と PROTREK Smart WSD-F20に関するヒアリングを実施。

11月7日

カシオ・マーケティング・アドバンス株式会社 訪問

…ホームページ作成についての打ち合わせ

【堀口切子】

3月15日

株式会社堀口切子 訪問

…顔合わせや今後の活動についての打ち合わせ

5月11日～5月23日

法政大学校舎及び電話等にてメンバー間での施策 打ち合わせ

…江戸切子の現状分析や分析項目についての報告

6月20日

江戸切子マーケティング調査の為の百貨店ヒアリング調査

…江戸切子の販売方法の現状を調査する

10月3日～12月

堀口氏と今後の施策についての打ち合わせ

…電話等にて1週間に1度のペースで施策の擦り合わせを行う

12月7日～12月8日

京都きもの友禅にて伝統工芸品の今後の在り方などについて ヒアリング調査

…京都きもの友禅の方に協力を依頼
実際に今後の伝統工芸品の在り方についてのお考えを拝聴する

1月9日

キュレーションサイトへのアプローチ完了
…キュレーションサイトにアポイントメントを取り、記事の掲載を依頼する
今後はアポイントメントのサイトを増加させ、企画の効果増大を狙う

【株式会社ダイバーシティアンドグローバル】

2月5日～2月6日

現地調査：リトリート館山にてヒアリング調査・市役所 訪問
…より現実的な施策提案にしていく為、打ち合わせ

2 結果・意義・所見

プロジェクトベースラーニング手法で実践的なマーケティングを研究する本プロジェクトでは「カシオ・マーケティング・アドバンス」「堀口切子」「株式会社ダイバーシティアンドグローバル」とのコラボレーション企画を現在進行している。企業とのマーケティングを行う事で得られる【企画の意義と期待される成果】として設定していた(1) 企業の商品の使用頻度増加や認知度向上 (2) 学生の実践知による学び (3) 学生のキャリア支援を軸に考察していく事とする。

【カシオ・マーケティング・アドバンス】

→学生目線での魅力の提案から、実績・実践知・キャリア支援を網羅
株式会社カシオ・マーケティング・アド

バンスとの市場拡大のマーケティング事業として行っている EC サイトに関しては、学生目線での魅力の提案・紹介を念頭に置きつつ、実際に『PROTREK Smart WSD-F20』というアウトドアスマートウォッチを活用したりメールマガジンを配信したりする事で、EC サイトからの閲覧数と購買数向上を目標とし、4月から12月に渡って約8ヶ月施策を行なった。学生目線での魅力の提案を実践する為に、法政大学の学生に協力を依頼し、部活動中や私生活などのあらゆる場面で1週間程度着用してもらった。これを4週に渡って1週4人程度のレビューを掲載しプロジェクトを進行させた。また、酒井ゼミナールのYouTube作成とポート部のインタビューを掲載するなど、法政大学生ならではの視点を重視した。その結果、メールマガジン配信が功を奏し閲覧数・購入数ともに向上する事となった。けれども、掲載の期間の長さや統一性への配慮が欠けてしまった事・購入者の購入時期との関連などから、施策の実施の際には購入者の心理状態もらいへの配慮を行ないながら自身の施策が発端となって行動に移ったのかなどの明確な評価情報が得られるような、施策後のフォローについての課題も浮き彫りになった。一方で、この発見はビジネスとの接点が少ない学生に対して、今後のキャリア形成のきっかけとなり、この学びを次のビジネスの場でも活かす事が可能となるであろうと考えられた事や実質数値としても結果が出ていることなどから(1) 企業の商品の使用頻度増加や認知度向上 (2) 学生の実践知による学び (3) 学生のキャリア支援において全てを網羅した形の施策を打ち出す事が出来たのではないかと結論づけている。

【堀口切子】

→企業の意向を汲み取り施策を投じる事

が、相互において成長性を生み出す

“堀口切子”の認知度向上と使用機会の増加を目指す企画考案・実施を行うプロジェクトに関しては当初、プロモーションビデオの自主制作を計画しており、動画を媒体として他企業との差別化を図る事や認知度の向上・集客効果から日本の伝統工芸品の活性化を目指す取り組みを行おうとしていたが、堀口氏とのヒアリングを重ねていく中で、堀口氏には今後打ち出そうとしている施策が多くある事が理解出来た為、目指す方向性は同一としつつも(1)企業の商品の使用頻度増加や認知度向上の際に考えていた「学生視点で企画のターゲット設定や課題解決方法を導く出す事・今までは未開拓であった部分へのアプローチの可能性」の軸からブレないように施策を練り直した結果、潜在的な消費者ニーズを把握し、そのニーズに合った施策をとる事で購買行動に繋げるという事を念頭に、以前まで堀口氏に興味のある生活者が販売経路だった為、堀口氏が現在思案していないような新たな層への周知させる「生活に溶け込む江戸切子」をコンセプトに江戸切子を広める媒体を生活雑貨・芸術・食・文化・旅行・スタイリッシュ感などのあらゆるキュレーションサイトに紹介の記事を掲載し様々な使用用途の提案から生活者へアプローチをしていく事を再定義した。ターゲットには江戸切子を使用するイメージの湧かない堀口氏とは関連の無い方々を対象としている。その対象者としてライフスタイルに美を意識している30代の女性を設定しペルソナを思案しており、またそのターゲット層が多く存在するキュレーションサイトからの購入ページへのアクセス数や閲覧数などから消費者の購買行動における心理状態などを考察する事としている。なお、現在では複数のキュレーションサイトにアプローチをかけ、何社か掲載見込みあるといった現状に

なっている。クライアントの意向を汲み取っていく事で、手に余る部分に施策を投じる事が可能となり、新たな市場開拓へと繋げる事が出来、また学生にとっても企画との向き合い方に関して新たな視点が生まれる為、相互において成長性があり、より画期的方法を立案する事が出来るのではないかという結論に至っている。

【株式会社ダイバーシティアンドグローバル】

→両者における溝の埋め合わせが、地域活性化プロジェクトの成功へと繋がる

高齢化する地域において、どのようにアプローチをしていく事に効果が見込めるのか等の地域活性化の施策の考案をする事を目的とした本プロジェクトでは千葉県の館山市にて実際に調査を行う事となっている。具体的な地域活性化案については、館山地域でのヒアリング調査を行い現地の人々が「高齢化問題に対してどのような捉え方をしているのか」を明確化していく事で生活者に対し寄り添った提案が出来ると考えている。なお、以前の調査によると館山市の目指す将来の方向性としては、①館山市の特性を活かした多様な「しごと」の創出②館山市への「ひと」の流れ作り③結婚・出産・子育てのしやすい「まち」づくり④安全・安心で、持続可能な「まち」づくりであった為、この事柄を踏まえながら考案して参りたい。また市役所にて現地でのヒアリング調査を基盤とした提案をさせていただく中で、より現実的な内容へと詰めていく事が可能であるとした上で、現在当日に向けて具体的なアジェンダを作成し効率的に動けるようゼミナールの学生が主体となり活動を進めている状態にある。加えて施策考案の為に館山・リトリートの事前調査や仮説立てを行う事で当日のヒアリング調査・市役所及びリトリート社長への質疑などの

やり取りもスムーズに行なえる狙いがある。現地の人々との直接的な関わりが頻繁にあるわけではないと考えられる為、両者との間に生まれてしまった溝の埋め合わせを取り持つような存在が、地域活性化プロジェクトの成功へと繋がるのではないかと考えている。

これらの全施策において、企業の課題解決と学生のビジネスへと繋げる力を養う力を身につけられると考えている為、双方において次のビジネスの場への足掛けとなる事を証明していけるよう活動していく事を重点に置いていく。

メディアを通じた異文化交流学習の支援

代表者：坂本ゼミ 伊東拓馬

1 実施概要

ユネスコの教育理念に基づき、学生が主体となって国内外の子どもたちのメディアを活用した異文化交流学習を支援することを目指した。

①国内小中高校におけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援

- ・ 4月25日 埼玉県立伊奈学園総合高校(担当:宮木)
中国大連市立大十六中等学校とのビデオレターの授業支援
- ・ 5月中 Plural +への出展映像の制作(ゼミ生全員)
2つのグループに分かれそれぞれ「在日カンボジア人」「障害を抱えた人々への偏見」をテーマに映像作品を制作
- ・ 5月19日 法政女子高校(担当:伊東)
スーパー・グローバル・ハイスクールの関連授業としての映像制作の授業支援
- ・ 5月20日 岩倉高校(担当:石川・安岡・小野寺)
iPadを用いた映像制作の授業補助
- ・ 7月7日 小松川第二中学夜間学級(担当:小野寺)
夜間学級の見学

(1)小中高校での異文化交流学習の支援を通

し、文化や社会、考え方の様々な違いと配慮と理解、そして技術的な環境の違いを本質から理解することを大切にする。人と人とのコミュニケーションスキルを身に付ける。

(2)学校の先生や子供たちにとっては、この授業支援を通して、メディアリテラシーの理解や情報モラルを身に付けることにつながる。

②東日本大震災の被災地での取材

- ・ 9月11日～9月14日(担当:伊東・坂田・堀口・宮木・小野寺・石川・白土・安岡)

9月12日 双葉町

双葉小学校の被災地ドキュメンタリー映画製作のサポート

9月13日 富岡・川内村

浪江仮設商店街で復興事業を行う三浦さん取材
富岡さくらモールで被災者の方々にインタビュー

9月14日 いわき

四倉小学校でインドネシア・アチェとの映像を通じた異文化交流の授業支援

(1)実際に被災地に足を運んで、自分の目で見て経験することで、メディアから受けとった情報だけで構築された被災地のイメージを変える。

(2)映像制作やインタビュー活動を通し、情

報受信者から発信者になるという実践の場を通して、メディアリテラシーの実践を行う。

③発展途上国であるカンボジアにおけるメディアを活用した異文化交流とキャリア教育の支援（担当：上野・坂田・石川・安岡・白土）

・ 12月20日～12月28日

12月20

20日～22日 シェムリアップ

アンコールワット見学

アンティエ幼稚園見学 日本の援助によって造られた幼稚園の見学

・ 12月23日～27日 プノンペン⇄モンドルキリ

メコン大学 学生と協働映像制作を1週間に渡って行った

協働映像制作を通し、カンボジアの文化や歴史などについての探求学習を行った

以下、コンテンツ内容（一部）

キリングフィールド見学 ポルポト政権下で起きた大虐殺の歴史を学んだ

トントローチ小学校 市内から車で2時間ほど離れた田舎の小学校で、プロジェクターを用いた授業支援と、iPadを用いてビデオレターを作成の補助

VDTO 小学校 カンボジアの小学校の視察

VDTO 小学校の周りのスラム街取材

(1)情報メディアとして最も相互理解が可能なツールである映像を用いて、協働で制作を行うことで言葉の壁を最小限にし、お互いの国の文化や考え方の違いについて理解を深める。

(2)日本には感じるこのできない、カンボジアの現状や歴史がもたらした影響について深く考える。

活動②及び③は、インタビューや取材見学を各5～10分程度で映像としてまとめた。

2 結果・意義・所見

①(1)東日本大震災の被災地での取材（スキル・結果）

被災地に実際に自分の足で訪れ、目で見て経験することで、被災地の偏見（風評被害）を見直すことにつながった。また、映像制作を行うことによって、現代のグローバル化、情報社会において大切な情報を批判的に見て選択し、発信する力が身に付いた。取材や編集作業を通し、様々なコンフリクトを乗り越える中で、就職活動や、社会にでる上で必要な問題解決能力や、主体的行動力が身に付いた。

(2)被災地研修とそれを映像化した体験について

「伝える」という作業は、起こった出来事を意味が通じるように並べ、相手に「わかってもらいたいこと」である。だから映像制作を行うことで、体験した出来事に対する捉え方が変わり、自分にとってどういう意味を持つのか、どんなものだったのか、認識することが出来るようになる。伝わり方は、前後関係を整理し、どんな順番で情報を出すのかで変化するから、自分が「どう伝えたいか」を明確にすることは映像制作において必要不可欠である。つまり、映像制作は、体験したことが自分にとってどんな意味を持つのかを考えるきっかけになる。体験をただの体験として終わらせるのではなく、「体験したことを捉え直し伝えること」を通して自分の中に落とし込むことに自分の体験を自分で作品に仕上げるこの意味がある。

②発展途上国であるカンボジアにおけるメディアを活用した異文化交流とキャリア

教育の支援

・ 考察

メコン大学の学生との映像制作の過程では、字幕やナレーションを入れる言語能力が伴う作業を通して、コミュニケーションが上手いかない事のもどかしさを痛感した。しかし、試行錯誤を繰り返しながらも、限られた時間の中で1つの作品を作り上げる事で、良い作品を作るという『結果』ではなく、達成感や充実感を強く感じ、協働映像制作がもたらす意義について体感した。また、この活動で現地の人の食事や生活を体験し、考え方に触れる中で、自分達の持っている考え方や当たり前だと思っていた価値観が覆された。その結果、異文化理解を深めると共に、自分が置かれている状況や環境について改めて考え直す事に繋がる経験となった。

・ カンボジアでの異文化交流

メコン大学の学生と活動を共にする中で多くの異文化に触れ、自分の持っている価値観が当たり前ではないということを身に染みて感じた。日本人とカンボジア人の金銭感覚や衛生環境などは、全く異なっていてカルチャーショックを受けた。これらの異文化を体験することを通して、日本で当たり前に行えることや生活環境に感謝するという意味ではなく、自分が置かれている状況や環境について改めて考え直す事に繋がり、それぞれの当たり前を受け入れ、理解しようとする異文化理解の重要性に気が付いた。これは、インターネット上で知識を得たり、動画を見たりしただけでは感じる事の出来ないものである。グローバリゼーションが進む現代で、他の国の文化や考え方を受容し、自国の文化を伝えるスキルは不可欠である。

・ 映像制作が持つ意義

映像制作の目的とは、「体験の言語化」と、「体験の映像化」である。これらの意義は映像制作相互インタビューを通し自分の感じたことを言葉にし、伝えることと、自分の体験をエピソード化する中で自分を捉え直し、自分の考えを深めることである。例えば、キリングフィールドの映像制作は、キリングフィールドの、どの場所でどんな感情を抱き、何が重要であるのかについて考える機会となった。キリングフィールドで赤ちゃんの足を持って木に頭を打ち付けて殺した場所であるキリングツリーや、実際に虐殺に使われた鉋や斧など見て、この大虐殺の歴史は事実であるのだと実感したということ、動画制作を通して再認識した。さらに、映像制作と通じて、歴史を机上で学ぶだけではなく、実際に訪れ、理解することの重要性について強く感じた。もし、単にキリングフィールドを訪れるだけであつたら、「怖い」や「悲惨だ」などといった感情を体感するに過ぎず、自分が何を考えているのかについて考えることは無かつた。編集作業の中で、体験をエピソード化することを通して、自分の考えや価値観を考え、深めることができるのである。

・ カンボジア活動を通じた意義、結論

このカンボジア研修を映像化する事を通して、言語の壁や、考え方の相違という困難な状況の中での協働映像制作では、日本では決して感じる事ができない達成感や充実感を感じる体験であつた事を理解した。また、自分の価値観が当たり前でない事を体感し、異文化交流の重要性を再確認することができた。つまり、映像化が持つ意義とは、体験から得た考えや感じたものをエピソード化する編集作業を通して、自分がその体験から何を学び、何に意義を感じたのかを再確認する事であると言える。

③地域学習支援の学生やキャリアデザイン学部の学生、学外の人々、作品を見てもらう人たちにとってどういう意義が生まれたか。

- ・ 現代のグローバル化、情報社会化において重要な、情報を批判的に見て選択し、発信する重要性に気づく。

・ 普段メディアから受けている情報をそのまま受けとるのではなく、批判的な見方を身に付けることにつながった。

- ・ 異文化交流を行うことによって人権への配慮、文化的、社会的な環境、考え方への大切さに気づき、コミュニケーションスキルを身に付けた。

共働き世代の家庭教育のあり方に関する研究

代表者：寺崎ゼミ 中島雪菜

1 実施概要

実施期間は、2018年5月～12月。全体の取りまとめは中島雪菜が行う。

活動スケジュールおよびそれぞれの活動の取りまとめ担当については以下のとおり。

【質問紙調査】

①質問紙準備 5～6月 調査担当保育園とのやりとり（担当者：矢口萌莉、重村拓利）

5月から6月前半にかけて、ゼミ生それぞれが質問したい内容について考えた。初めに仮説をたて、それに伴って質問事項を作成した。最終的に決定した質問をまとめて質問紙を完成させた。

6月29日、調査対象の保育園に訪問した。そこで、調査のついでの打ち合わせを行った。加えて、保育園の園長から保育園の現状や課題、園長はどのようなデータを欲しているかについてお話をうかがった。

②実査 7月（担当者：初山実紗、相原礼奈）

7月後半に保育園から調査書を受け取った。

③データ入力 7～8月（担当者：全員で分担）

④データ分析、レポート作成 8月～12月

⑤報告書製作 1月 PDFファイルで配布する。（担当者：中島雪菜、矢口萌莉、重村拓利）

2月5日、調査結果をもって調査対象保育園に報告にうかがう。

【聞き取り調査】

①事前学習 5月～7月 先行研究の検討（担当者：学習は各自で行った）

5月から7月にかけてゼミ生各自でテーマ決めを行い、先行研究を参考に訪問先での聞き取り内容を検討、8月に各自でのテーマに基づいた聞き取り内容を決定した。

②現地調査 8月24日～27日

島根県鹿足郡吉賀町に青山学院大学と上智大学の学生とともに訪問した。

島根県立吉賀高等学校と吉賀町立柿木中学校を訪問し、現地の高校生と中学生から中山間地域の子供の家庭教育がどうなっているのかということを質問した。

他にも地域の方や役所の方など、地域の大人へのインタビューも行った。すると大人の方には都市部に出たから吉賀町に戻ってきたという方も多く、都市部と中山間地域での家庭教育に対する意識の違いについてうかがうことができた。

また、吉賀町の文化や産業を吉賀町体験ツアーに参加することで、その地域の文化、特徴について学ぶことができた。

③事後学習 9月～12月

ゼミ生各自でインタビュー結果や訪問して得た体験をまとめ、レポートを作成した。

10月3日に吉賀高校の生徒が東京を訪問し、都市部と吉賀町の農業、漁業、医療、行政、商業がどのように異なっているのかを各自で訪問先を設定し、調査を行った。

④報告書制作 1月 PDFファイルで配布する。

（担当者：中島雪菜、矢口萌莉、重村拓利）

2 結果・意義・所見

【質問紙調査】

〈仮説〉

本調査では、次の5つの仮説を検証した。

- ①子供に対する教育期待が高まるほど子供の食事のマナーの習得期待時期が高まる。
- ②パート・アルバイトの親は、子供とコミュニケーションをとる機会が少ない。
- ③子供と遊んでいる内容は親の性別で違いがある。
- ④学歴・生活水準によって旅行に求めるものが異なる。
- ⑤親の教育期待が高いほど習い事に通っている。

〈結果〉

①子供に対する教育期待の時期に関係なく、マナーの習得は保育園卒業までに期待している親がほとんどだったため、仮説は支持されない。しかし、6割以上の親が最も早い段階でマナーを習得してほしいと思っている。②「子供と一緒に夕食を食べる親」と「子供と今日の出来事を話す親」は、フルタイムの親に比べ、パート・アルバイトの親の方が少なかったため、仮説が支持された。先行研究では、パートアルバイトの親の子育て肯定感が比較的低いとある。本研究では、子育て肯定感の差と、子どもとのコミュニケーション量の差とが関係していると考察した。③子供の性別によって、コミュニケーション量に差が生まれてしまうことを問題とする。「する」「時々する」が5割を超えた項目が、母親は11個中10個であったが、父親は4個しかなかったことから、父親においてのみ仮説は支持された。また、父親は女の子らしい遊びをしていないことが分かった。④親が自分の子供に求める学習到達歴と家族の旅行先として「学習系の旅行先」を選ぶことには関係性がなかった。そもそも、自然体験や歴史的な場所を旅行しない親が多いということが分

かった。旅行自体を学びの場として考えていないと考察した。⑤親の教育期待と習い事の有無はほとんど関係性がなかった。原因として考えられるのは、保育園を対象に調査を行ったことである。年齢層が低いだけでなく、共働き世帯が多く送り迎えができないという理由も考えられる。

〈考察・所見〉

以上のことから、①②③のコミュニケーションという点では、コミュニケーション量が親の就労形態・性別で差が出ることが分かった。また、多くの親がしつけに関心を持っているのは、しつけをコミュニケーションの土台として捉えているのではないかと考える。

④⑤の親の教育期待という点では、親は教育期待が高いとしても旅行先や習い事には影響がでないことが分かった。

共働き世帯が多く出現した現在、子供との関わり方も多様化している。その中で、親たちが子供に求めるものを考えることができた。

【聞き取り調査】

〈インタビュー結果〉

聞き取り調査では、地域の家庭教育のあり方を明らかにすることを目標に調査を行った。

現地調査では、最初に島根県立吉賀高等学校の1年生に対して、家での家庭教育の様子についてうかがった。すると、家庭での進学意識は同じ高校に通っているにも関わらず、大学進学を目指している生徒とそうではない生徒では親の勉学に対する意識が異なることが分かった。次に吉賀高等学校の2年生に質問したところ、2年生になると進路選択が決まっている生徒が多く、その進路に合わせたサポートを家庭で行うということだった。そして最後に、地域の

方や役所の方など、地域の大人へのインタビューを行った。すると、大人の方々は一度都市部に出て仕事をしていたという人が多く、都市部の家庭教育がどのようになっているのかを理解している人もいた。そのうえで、吉賀町で子供をどう育てているのかをうかがったところ、子供に対して食べ物に気を使っているという意見があった。吉賀町は畑を持っている家庭が多く、自分の家で採れた野菜を食べ、またとれた野菜を地域の方と渡しあうことで、地域間でコミュニケーションをとれるようになるということ述べていた。また、大人の方は子供にずっと吉賀町に残ってほしいというのではなく、一度都市部に出て様々な経験をした後、吉賀町に戻ってきてほしいと考えている人が多かった。そのため、勉強をさせるために家にずっといさせるのではなく、家の外で様々な経験をさせるという家庭が多く存在した。そして、一度都市部に出たことで、地方と都市部を対として考えるのではなく、統合して考えるようにし、互いをリスペクトして接していくように子供に教育しているという考え方もあった。

〈考察・所見〉

調査した結果、高校生からは家庭教育の対する意識調査が行えなかったが、大人の方々からは多くの意見を得ることができた。中でも、地方と都会は対として考えるのではなく、統合して考えられるようにし、互いをリスペクト仕手接していくように子供に教育しているという考え方には感銘を受けた。この考え方は日本の都市部と地域間のことだけではなく、大きなことで言うとこれから先のグローバル社会にも通じる部分があるのではないかと考えられる。実際に、Hammer と Bennett (1998) の異文化感受性発達モデルでは、人は自文化中心主義の立場から相手の文化を低く見がちになってしまうが、文化相対主義の立場から相手の文化を知り、経験することで自己成長と他者理解ができると述べている。このことから都市部や地域にかかわらず、互いの文化や考えをリスペクトするような家庭教育をしていく必要があるのではないかと考えた。

地域産業活性化プロジェクト

代表者：酒井ゼミ 渡邊 慶

1 実施概要

【長野県飯田市の活性化】

飯田水引単体ではアプローチがかけられないターゲット層に、浅草寺でのワークショップや東京ビックサイトでのMinneイベントを通じて水引産業の認知度の向上・活性化を図った。

4月18日

- ・東京和紙社員との打ち合わせ（篠田様）
- ・浅草神社の清め祓い

4月27日

- ・Minneでの水引ワークショップイベント（東京ビックサイト）

5月18日

- ・浅草神社での水引ワークショップ

6月9日（サポートプログラム助成金対象）

- ・水引組合員方との打ち合わせ

6月27日

- ・浅草神社とイベント開催に関する打ち合わせ（矢野様）

9月7～9日（サポートプログラム助成金対象）

- ・飯田市水引組合職員との浅草ワークショップの最終打ち合わせ

12月8日（サポートプログラム助成金対象）

- ・浅草神社での水引ワークショップ

その他

日程2018年11月1日

- ・浅草神社でのワークショップに向けて作成したフライヤーの配布や、宣伝活動を行った。
- ・実際のワークショップでは24人がワークショップに参加

【東京都立川市の地域活性化】

広告動画を使った商店街のPR活動を用いることによって、これまでよりも広く、より印象的なマーケティングを実施することが可能になり商店街の注目度の上昇・活性化に繋がると考え立川北大通商店街の動画作成を行った。加えて前年の企画である立川羽衣商店街のマップ政策をし、活用してもらうようマーケティング活動を実施した。

5月14日

立川北大通商店街 現地調査

6月21日・7月19日

立川商店会連合会とのミーティング（動画イメージについて）

7月14日

羽衣商店街 現地取材・画像撮影

8月10日～2019年1月9日

羽衣商店街マップ作成

8月16日

立川商店会連合会とのミーティング（動画撮影について）

10月29日

立川北大通商店街以下7店舗 動画撮影

- ・高島屋
- ・三上鯉節店
- ・フロム中武
- ・菊谷商店
- ・丸屋本店
- ・BAR room
- ・路地裏ダイニング brio

10月30日～2019年1月9日 動画編集

【新潟県十日町市の活性化】

今までの社会人提案企画とは別視点で大学生特有の企画を実施することにより、これまでと異なったイベント要素を組み込むことが可能であり

- ・オフラインチーム
- ・インフルエンサーチーム
- ・Twitter チーム
- ・外部メディアチーム

以上4つのチームに分かれて「大地の芸術祭」の認知度を広げ、十日町の地域活性への活動を行った。

6月

- ・渋谷ヒカリエでの「大地の芸術祭告知イベント」参加
- ・フライヤー/ポスター設置協力店のピックアップ・営業
- ・Twitterのツイート内容の考案
- ・協力可能な外部メディアの探索・営業
- ・学生インフルエンサーとの打ち合わせ

7月

- ・フライヤー/ポスター設置協力店のピックアップ・営業
- ・Twitterのツイート内容の考案・発信開始
- ・外部メディア「ホリデー」との打ち合わせ
- ・学生インフルエンサーとの打ち合わせ

8月

- ・大学生協、飲食店、上野の森美術館でのフライヤー設置
- ・Twitterのツイート内容の考案・発信開始
- ・外部メディア「ホリデー」との打ち合わせ/掲載
- ・学生インフルエンサーの発信活動開始

備考

9月に十日町へ現地調査に行く予定だったが、台風の影響により中止。

代案として「京都着物友禅本社」へ現地調査に行き、十日町市への現地調査目的である地方産業の活性化に関する会議を実施。

2 結果・意義・所見

【長野県飯田市の活性化】

企画詳細：

2018年12月8日（土）に浅草神社で水引ワークショップを行った。日本伝統工芸品飯田水引を再起するために人が多く集める浅草を選び、より多くの人々に水引に興味をもち、さらに次の世代へ引き継ぐことを目指した。手作業に興味のある子供と金銭的な余裕を持つ人を対象にしたいので、ターゲットは30代～40代の女性と子供に設定した。講師は飯田からの水引職人さんである。

企画実施による結果としては参加者が合計24人いた。収支合計は¥5500である。

当日アンケートを実施したため、顧客の評価をもらうことができた。

所見：

もし同様なイベントを実施する場合、予約方法をウェブサイト以外に紙媒体の申し込み方法を利用すると参加者数が増えると考えられる。また宣伝方法については会場周囲に集中して宣伝するほうが効果的になる可能性が高いであろう。

次に実際に足を運ばなくても水引について拡散できる企画もあったほうが良いと考える。例としてはSNSアカウントを作成し、飯田水引の歴史や意味や結び方をSNSから発信すべきであると考えられる。このような実際に水引と接するイベントやワークショップと長期的に飯田水引というブランドを発信することを同時にしたほうが水引の認知度をより早く高めるのではないかと考える。

【東京都立川市の地域活性化】

企画詳細：

前年のプロジェクトの引き継ぎとして以下2つのマーケティング施策を実施した

1. 立川北大通商店街に所在する小売店と提携して、プロモーション動画の作成。
2. 立川市羽衣商店街に所在する小売店と提携して、散歩用マップの作成。

企画実施による結果は商店街の店舗間の交流を高めることができた。宣伝方法として今まで行えていなかった動画による広告方法を実現させた。

所見：

今回のマップ・動画作成には以下2点が判明した。

1. フライヤー以上に視覚・聴覚的に情報を

伝えられるため関心を引き、接触回数を高めることができる。

2. 商業集積のマップ・動画制作には、参加店舗の協力が必要ということ。

しかしここには課題となる根本的な課題があり、

- ・ 商店街組員が動画作成技術を持っていない
- ・ 広告活動のための外注費用を負担する中心的存在がいない

商店街を担っている組合員は高齢化が進んでいる。そのため現代広告に勝る広告を作ることが技術的に困難であり、周囲にスーパーマーケットができることによってより顧客推移があるため商店街の衰退が考えられる。しかし今回動画制作を行ったため商店街の集団意識がより芽生え、機会さえあれば動画広告作成には大きな広告効果と集団形成の好影響がある。商店街は製品や販売方法に力を入れるとともに、広告活動を周囲の潜在的消費者へ届く方法で行う必要がある、スーパーマーケットでは得ることのできない1店舗ごとの差別的価値を提供していくことが重要である。また、今回のように「能力発揮機会が欲しい若年層」と「能力発揮機会を与えたい商店街」という掛け合わせで随時活動を行い、常に価値観の流動性を高めることも重要なのである。

【新潟県十日町市の活性化】

企画詳細：

株式会社アソビューと提携し「大地の芸術祭」をマーケティングすることで十日町市の活性化を図った。

- ・ オフラインチーム…実店舗に広告物を設置してもらう営業活動を行う
- ・ インフルエンサーチーム…インフルエンサーにイベントの発信をかけあう

- ・ Twitter チーム…ツイート内容を自ら考案し、公式アカウントで発信する
 - ・ 外部メディアチーム…外部のメディアにイベント掲載の営業活動を行う
- 以上4つのチームに分かれて「大地の芸術祭」の認知度を広げ、十日町の地域活性化への活動を行った。

所見：

Web 上での広告活動は地域産業の活性化を促進することが判明した。今年度のオンライン購入数は過去最高数値になった。しかし私たちの活動の貢献度は低かったと思われる。周知を広げるため様々なメディアに掲載することができたことに加えて、認知度の初期値は高かったものの実際に購入に至った人は少なかった。リアルでもフライヤーを1000枚配り、QRコード付きのフライヤーを協力店舗に設置したがこちらも

購入にはそこまで至らなかった。京都着物友禅を例に挙げても、イベントやテレビ広告を打ち出し周知は高めているものの、実際の発注数や購入数は増加していない現状にある。

つまり、周知を広げる方法はWebで正しかったが次の「購入」という行動を生起するためには興味関心を引くだけでは困難であることが判明した。しかしブランド知名度が上がるほど関心から購入に移る割合も増えるため、地域産業のブランド化と認知度の向上、その次に「行動を生起させるような広告手法」を行うことによって、産業への金銭的資源を投下することを可能になる。このように今までの認知を広める広告活動に加えて、新たな行動生起広告を生み出すことが活性化を促進する上で重要なのだ。

アートを通じた2つの世代間ワークショップ

—子ども・若者・高齢者をつなぐ—

代表者：荒川ゼミ 田内杏奈

1 実施概要

<企画の背景>

現在、日本は超高齢社会へと向かっている。内閣府の「平成29年版高齢社会白書」によれば、1970年には65歳以上の高齢者は総人口の7%であったのが、2016年では27.3%に達したという。さらに2065年には、国民の約2.6人に1人が高齢者となる社会が到来すると推計されている。こうした状況にもかかわらず、核家族化が進んだことで三世帯世帯は大幅に減少し、一人暮らしの高齢者の増加とともに、彼らの孤立化が問題視されている。その背景には、身内ばかりでなく近所の人びとや地域とのつながりが疎遠になっている現状があると考えられる。

一方、子どもや若者世代もまた、核家族化によって異世代との関わりを失うことで、さまざまな問題を引き起こしている。たとえば齊藤（2010）も指摘するように、子どもの成長段階において、異質な存在にふれて多様性を認める力を育む機会が十分に得られていないため、対人コミュニケーションや他者への思いやりが近年欠如する傾向にあるという。

このような状況のなかで、さまざまな世代の人びとを、家族の垣根を越えてつなぐ新たなコミュニティの必要性が高まっている。しかし、内閣府の「平成25年 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」によると、若い世代との交流に参加する意思がある高齢者は約6割なのに対し、実際に参加している人は約4割に過ぎない。これ

は、世代間交流が行われる機会が少ないことを示していると考えられる。従って本企画では、従来のような、高齢者が若者世代に知識や伝統を伝授するものや、逆に若者が高齢者を支援するといった一方の交流の形式ではなく、知識や経験、能力を問わず、それぞれの感性を生かした自由なコミュニケーションが可能な“アート”という手段を用いて、より身近で容易な世代間交流のあり方について研究した。

<実施内容>

本企画では、まず、現代社会における世代間交流の意義とその現状について、文献調査とヒアリング調査を行うことにより、全体を把握することに努めた。こうした調査の結果から、世代間交流の必要性を理解し、実際に高齢者と子どもそれぞれの世代とゼミ生とが交流するワークショップを、アートの要素を含む題材を用いて企画・実施した。ワークショップは計三回行い、第一回と第二回は高齢者世代と大学生であるゼミ生がファッションを題材にして行ったもの、第三回は小学生とゼミ生が美術鑑賞のゲームを題材にしたワークショップであり、詳細は下記の通りである。

このワークショップによってもたらされた効果や気づきをもとに、世代間交流の必要性と今後の可能性を提言する。また、本ワークショップはアートの要素を活用させた内容にしたことから、アートがコミュニケーションにおいて非常に有効であること、そしてそれは、世代間交流においても当てはまる可能性についてまとめる。

■事前調査 日程 2018年7月5日～11月12日

7月5日

チームラボお台場の現地調査

11月3日

小平第二小学校高齢者教室の利用者およびスタッフへのヒアリング調査

11月12日

小平地域包括支援センター「まるっと仲よし隊」へのヒアリング調査

■第一回ワークショップ（西村・田内・早田・本間・加藤・斎藤・蓑・泉）

「服を語り合う。相手を知る。自分を見つめる。」於：東京都小平市

日時： 2018年11月30日（金） 午後13：00～15：00

場所： 小平市立小平第二小学校 高齢者交流室

参加者：高齢者15名（男性7名、女性8名）、大学生8名、交流室スタッフ4名（ワークショップの内容には不参加）

内容： 現在大学生の間で流行している「古着ファッション」を題材に、高齢者と大学生が衣服について語り合い、異世代の服や普段着用しないファッションを体験するものである。

①トーク1 衣服にまつわる幾つかの質問を通して世代間のコミュニケーションを図る。

②若者ファッションの資料を基にファッションについて知る。

③若者ファッションの写真を見て、高齢者世代が気に入ったコーディネートを実際に試着し、その状態で個人および全体で写真撮影を行う。

④トーク2 ワークショップのまとめとふりかえり

■第二回ワークショップ（加藤・早田・斎藤）
「服を語り合う。相手を知る。自分を見つめる。」於：埼玉県越谷市

日時： 2018年12月26日（水） 午後13：00～14：00

場所： 越谷市中央市民会館 茶華道室

参加者：高齢者4名（男性1名 女性3名）、大学生3名

内容： 第一回と同じ。

■第三回ワークショップ（早田・斎藤・本間・加藤・蓑・泉）

「アートカードであそぼう！－美術鑑賞ワークショップ－」於：東京都江東区

日時： 2019年1月19日（土）14：00～15：00

場所： 東京都江東区コミュニティーセンター「グランチャ東雲」

参加者：子供5名（男子2名…4歳、6歳）（女子3名…7歳）、大学生6名

内容： 「アートカード」という、美術館に所蔵されている美術作品が描かれたカードを用いてゲームを行った。作品をよく観察したり、作品に対する考えを話し合ったりすることでコミュニケーションを図るものである。

①アイスブレイク 参加者の自己紹介後、ゴッホ、ダ・ヴィンチなどの有名美術作品を見せ、アート鑑賞への導入を図る。

②ゲーム1 代表者を1人決め、机に並べられた30枚のアートカードの中から、代表者がカードを1枚選び、参加者が質問をすることでどのカードであるかを見つけるゲームである。

③ゲーム2 5枚の手持ちのカードの中から得られたアート作品へのイメージを言葉に起こし、しりとりゲームをするもの。



2 結果・意義・所見

1. 世代間交流の意義と、ワークショップ実施に向けての事前調査

〈文献調査〉

いくつかの文献を持ち寄って検討した中で、斎藤嘉孝(2010)『子どもを伸ばす世代間交流』(勉誠出版)では、現在日本は高齢化社会に加えて核家族化が進んでいるため、高齢者と若者によるコミュニケーション不足が深刻化していることが指摘されていた。そこで私たちは、世代間交流の機会を増やす必要があると感じ、まずワークショップを行う前に高齢者と実際に会話する機会をもち、彼らの現状やニーズの把握に努めた。

〈ヒアリング調査〉

11月2日(金)に、東京都小平市立小平第二小学校の高齢者交流室をゼミ生数名で訪れ、高齢者が普段何をして過ごしているのか、普段若い世代の方と関わる機会はあるのか、といった質問をした。その結果、ほとんどの高齢者が、交流室に高齢者同士で集まることは多いが、違う世代と関わることはほとんどないと答えた。また、職員の方に話を聞いた結果、以前は小平二小の生徒が高齢者交流室へ遊びにくることも多かったが、学校側の規制などにより、ここ

最近は減少していることが明らかになった。

2. 第一回ワークショップの結果

80歳前後の高齢者が参加し、現在の時代背景と当時の時代背景の比較がとても明確になった印象が強かった。特に明確になったことは、事前に考えていた質問の中で「20歳の頃何を着ていたのか」という項目で、「お古を着ていた」や「洋服が溢れていなかったためミシンで自分で作っていた」という回答もあり、地味な色の服を着ていたという人が多い印象を受けた。

それに対し、現在の若者ファッションを紹介したところ、鮮やかな色使いや、古着との上下の組み合わせが高齢者の目線には斬新な組み合わせと映り、新たな価値観が生まれた。このように若者ファッションに対する関心が強く見受けられた。また、ワークショップ開始前の高齢者の反応は、あまり良い印象はないのではないかと予想していたが、若者ファッションへの興味が深まったことで、少しでも若者との隔たりを薄くできたと期待できる。ワークショップを通して、「衣服」というものは、服を着る以外にも文化として考えた時、人と人をつなぐコミュニケーションツールとしても有効だと感じた。今回、世代間交流において「衣服」を活用したワークショップを実

施したことで、若者ファッションや若者の価値観に対する高齢者の偏見を失くすことができたとともに、若者も高齢者の過去と現在の時代背景を知ることができ、「衣服」は世代間交流において有効な手段であると示すことができた。

3. 第二回ワークショップの結果

第一回ワークショップは80歳前後の参加者が多数であったのに対し、今回は60～70歳代の参加者がほとんどであった。この年代の違いから、衣類（ファッション）に対する意識も異なることがわかり、今回のワークショップの参加者は衣類について日ごろか興味関心を持っている様子が見受けられた。その結果、前回のワークショップの際とは異なった衣類の時代背景や知識について、我々大学生が高齢者から教わることも多かった。

また、小平市と越谷市では参加した高齢者の世代も人数も異なっていたが、共通していたことがある。それは、実際に衣類を手にとってみる、羽織ってみる、というように簡単な実体験を行うことで、いつも自分では着ないような服を選び、気軽に、純粹に楽しんでいる様子が見られたということである。参加者が身をもって自分の価値観と照らし合わせる経験をもつ機会を作ることが、印象に残るものを与え、1時間という限られた時間を有意義なものにすることが期待できると分かった。

ただし、今回の参加者は4人であり、先にも述べたように年代も異なっていたため、1回目のワークショップと正確な比較ができていない。しかし、このような多様な状況だからこそ、誰にでもわかりやすく馴染みのある「衣類」が、人と人とのコミュニケーションや世代間交流において有効な手段であることが証明できたと思う。

4. 第三回ワークショップの結果

このプログラムは、アートカードを用いた遊びを通して作品を注意深く見ることによって感性に働きかけ、想像力、観察力、言語表現能力を刺激することで得られる互いの視点を共有し、コミュニケーションを図ることで、子供と大学生の世代間交流を試みるものである。

まずアイスブレイクでは、ゴッホ、ダ・ヴィンチなどの有名美術作品を見せた。複数名認知を示したものの、全員が美術館に行った経験がなく、「美術館に行きたい」と答えた子供は普段から絵を描くことを趣味とする1名のみだった。

次に、アートカードを用いた2通りの遊びを行った。

1つ目は代表者を1人決め、机に並べられた30枚のアートカードの中から、代表者が1枚選び、参加者が質問することでどのカードであるかを見つけるゲームである。子供たちは色や形、描かれているものを中心に代表者に多く質問しており、そのヒントをもとにアートカードを集中して観察し、答えを導いていた。答えを導き出す過程で、質問と照らし合わせながらアートカードを注意深くみることに繋がり、特徴を捉える観察力が養えたと思う。

2つ目は5枚の手持ちのカードの中から得られたアート作品へのイメージを言葉に起こし、しりとりゲームをするものだ。全員がカードを集中して見て、自分の言葉でイメージを発言していた。最初発言していなかった子供も、徐々に発言を増やすことが出来ていた。また大学生よりもイメージを素早く言語化し、柔軟な視点でアート鑑賞が出来ていると感じた。

5. 結論

三回のワークショップを経て、我々は世代間交流が有効であると判明したことはも

ちろん、今までになかったコミュニケーションの場を提供できた。また、ワークショップ参加者からのフィードバックとしては、すべてに共通して①「今までやったことのない内容であった」②「楽しかった」という声があがった。

世代間交流をするにあたって、今回使用した、具体的な体験を伴う「衣類」や知的好奇心を刺激する「アートカード」は、参加さえすれば誰でも楽しめる可能性が高いため、世代間交流としては非常に有効な手段であろう。世代間交流で行われる、昔遊びやモノづくりのようなものとは異なり、特定の専門的な知識の必要がないことが「アート」を用いることの利点である。結果、世代間交流のモデルとしてアートを活用することが効果的であることを示すことができた。

しかしその一方で、参加者を募集する広告の仕方に工夫が必要であったことが指摘できる。実際、企画の内容の魅力を的確に示しきることができず、片手で数えられる

ほどの参加者しか集まらなかった。昔遊びやモノづくりのように目的がはっきりしているものは、専門的な知識を持つ人から教わることができるという利点が目に見えやすいため、その分参加者を集めるために必要な告知がしやすい。それに対して、アートを活用した際には、参加する意義が目に見えづらいことが参加者が集まりにくかった理由の1つであると言える。

今後の課題として、感性を働きかけるアートをを用いる世代間交流を広めていくためには、今回のワークショップを活かして現場の雰囲気や伝わるような広告にするなど、企画内容を伝える準備段階にさらに力を入れる必要があることが挙げられるだろう。

6. 主要参考文献

内閣府「平成29年版高齢社会白書」；内閣府「平成25年 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」；齊藤嘉孝(2010)『子どもを伸ばす世代間交流』勉誠出版、ほか。

大学受験をテーマにしたマッチングサイト

代表者：中村莉衣

1 実施概要

大学受験生の悩みや疑問を、インターネット上でのアンケートや学生へのインタビューを通して調査。この調査の内容をもとに、制作するマッチングサイトの方向性を決定し、作業を進めた。

2018年10月1日～10月31日

ウェブサイトの制作を依頼する事業主の調査及び選定

数多くのウェブサイトの制作会社があるものの、今回の予算内で企業にサイトの制作を依頼するのはかなり困難であることを知る。知人の紹介でフリーランスのエンジニアの方に相談させて頂き、サイトの制作を依頼。

受験生向けの Twitter アカウントの作成

マッチングサイトを運営するにあたり、受験生と講師を集客しなければならない。制作するサイトの性質上、集客はできる限りローコストで行えることが望ましく、そのため Twitter のアカウントを制作。受験生に有益な情報を発信することで、フォロワーの数を増加させている。今後はマッチングサイトへの誘導を促すための情報も発信していく予定。

2018年11月1日～12月1日

インターネット上での情報収集

インターネット上で受験生の質問や相談を検索したり、新しく制作した受験生向け

のサイトでアンケートを取ったりすることで、受験生の悩みや不安をより深く理解するように努めた。

アルバイト先の予備校での簡易的なインタビュー

予備校でのアルバイトを行う中で、受験生がどのような不安や悩みを抱えているのか、そしてそれらの解決に対してどのような解決策を求めているのか、簡易的なインタビューを実施。

他社の競合サイトの調査

受験のマッチングサイトは現在もいくつか存在し、それらがどのように集客および運営をしているかを調査。より良いサイトを制作できるよう、良い点を取り入れ、悪い点の改善案を考案。

2018年11月1日～1月20日

マッチングサイトのデザイン及び機能を、制作者と相談しながら決定

限られた予算内でマッチングサイトを制作するため、理想とするモデルから必要な機能を取捨選択しながらサイトを制作。制作者に当方のイメージが正確に伝わるよう、Skype やチャットワークを使って複数回、打ち合わせを行う。

10月1日～今後も継続予定

受験生向けのウェブサイトの制作および更新

Twitter から集客できる数は限られており、検索エンジンからの流入を狙い、受験

生向けの簡易的なウェブサイトを作成。受験生向けの有益な情報を発信することで、検索エンジンで受験に関するワードを検索した受験生を集客。今後はこのウェブサイトから、マッチングサイトへのプロモーションを行う予定。

講師向けのウェブサイトの制作および更新

受験生からの質問に回答してくれる講師を集客することも必要で、講師向けの簡易的なウェブサイトを作成。当マッチングサイトを利用する講師は、受験の指導に興味があることが予想されるため、予備校でのアルバイトや就職に関する情報を発信。こちらからも、マッチングサイトへのプロモーションを行う予定。

2 結果・意義・所見

大学受験生の悩みや疑問を解決するため、マッチングサイトを制作。受験生は無料で自由に質問を投稿でき、それに対して登録している講師が回答をする。

制作開始時の予定は、受験生が自分に最適な講師に有料で、お金を支払えるマッチングサイトであった。しかし調査を進めるにつれ、高校生が自らインターネットを通してお金を支払うということに高い障壁があることを知る。より多くの受験生の助けとなるよう、無料のQ&A型のマッチングサイトに変更。Twitter及びウェブサイトで講師や受験生に有益な情報を発信し、マッチングサイトに受験生及び講師を集客し、サイトを運営していく予定。将来的には広告費で利益を獲得し、利益の一部を回答者である講師に分配することで、サイトの規模を拡大していこうと考えている。

・受験生が抱える悩み

予備校で講師としてアルバイトをしてい

る中で、受験生は多種多様な悩みを持っていることを体感している。私はいつも相談を受けるが、受験したことが無い大学の対策法や、受験時に選択していない教科の勉強法など、回答が難しい相談も多数寄せられる。予備校に通っている受験生でもこれだけ悩みを抱えているのだから、独力で勉強している受験生はさらに多くの悩みや不安と戦いながら勉強を進めていると考えられる。Twitter上での受験生の発言を見ても、常に受験に対しての不安や疑問を持っていることがうかがえる。受験や勉強そのものに対する悩みが多く、勉強に集中することができず、思うように学力を伸ばせない受験生が多くいることが予想される。

・高校生の金銭の支払いについて

受験生の大半を占める高校生は、クレジットカードを所有していない可能性が極めて高い。その上、銀行のキャッシュカードも所有していない人が多い。そのため金銭を支払う際には、銀行の窓口まで足を運ばなければいけなくなり、金銭の支払いに大きな負担が生じてしまう。また平日の夕方以降に勉強や部活動をしている高校生にとっては、銀行の窓口での支払いも難しく、支払いができない可能性が高い。

競合他社のサイトを見ても、高校生がお金を支払ってサービスを利用するサイトは、保護者の世代にも認知度が高いサービス以外は、利用者が少ない。

上記のことから、当初に企画していた「受験生が有料で、自分にマッチした講師に指導を依頼できる」マッチングサイトではなく、「受験生が無料で質問や相談を投稿でき、適切なアドバイスができる講師が回答する」マッチングサイトへと軌道を修正。

・講師側のメリットについて

無料で利用できるという点から見ても、

受験生側には多くの需要がある可能性は高い。一方で講師側にとっても、メリットは大きいと考えている。

受験に関する情報を発信するため、クラウドワークスというマッチングサイトを使って、少額のお金を支払って私（代表者：中村）の専門外である理系科目の情報を収集した。少額の報酬で募集をかけたにもかかわらず、想像以上の応募が集まり、応募時の文面を見ても、受験に対する情熱を感じられた。実際に契約した方々も、こちらの要望をはるかに超える情報を提供してくださった。この経験を通して、受験に対する思いが強い方は、金銭的なメリットがやや小さくても、自分の情報を受験生に提供することにやりがいを感じてくれるのではないかと感じた。また情報を発信する過程で、受験生の悩みを理解でき、なおかつ自分の知識やノウハウを磨くこともできるので、とても有益だったと連絡をいただいた。

当マッチングサイトでは、講師の回答に対して投票をできる制度を導入し、その投票数に合わせて少額の報酬を付与することで、十分に講師はメリットを感じてくれるのではないかと考えている。

・入試システムの変更について

2020年度よりセンター試験が廃止され、その件について現在の高校1年生の不安や疑問がインターネット上で多数見受けられる。新しい入試システムにどのように対応していけば良いか、そもそも入試システムはどう変わるのかといった疑問を持ちながら勉強しなければいけないというのは、受験生にとってとても大きな負担になるだろう。誤った情報を収集してしまう危険性も考えられる。新しい入試のシステムに関する質問にも、受験に精通した講師が回答することで、受験生の大きな力になれると自負している。

また受験制度の変更に伴い、今後の入試問題は記述・論述問題の割合が増えていく可能性が高い。今までの調査の結果、記述・論述問題にニガテ意識を持つ受験生は非常に多いことが判明し、力を伸ばすためには添削を依頼しなければいけない。今後は自分の回答を添削してほしいという需要が増えることが予想されるため、当マッチングサイトを通して、添削の依頼ができるよう、拡大していく予定。

自分の意見を伝えよう！

——問題発信力を鍛えるシティズンシップ・プロジェクト——

代表者：筒井ゼミ 山田 心

1 実施概要

本企画では2018年11月19日及び前後1週間から10日程度、都立一橋高校公民科の3クラスにおいて、ファシリテーターとして活動した。ここでは、その活動実績につい

て詳述する。

【実施期間】 2019年11月19日、20日、12月3日、10日（各日2～6名程度。教室、学級規模に応じ人数を調整）

なお、11月19日は本科目担当教員の研究授業でもあった。

【事前準備】

日程	内容	目的
春学期	企画骨子作成（3年主体）	
夏休み	ゼミ合宿にて一橋高校教員と合同会	一橋高校の教員2名を招き、今年度の企画について大筋を話し合った。
10～11月	合同会議（2回実施）	教員の授業案をもとに改善点を話し合い、最終的なタイムテーブルにまとめた。この話し合いには、授業内容や扱う教材、それぞれの作業の時間の割り振りなど、昨年の様子を参考にしながら新しく授業を組み立てるという目的があった。
11月5日,6日,12日,13日	一橋高校学級下見（個人で）	一橋高校は定時制高校であり、様々な生徒が在籍するため、年度によって学級の「空気」が大きく異なる。これをきちんと把握する必要があるため、昨年度ファシリテーションに参加した学生や、ブリッジワン・スタディーサポートのメンバーである学生も下見に参加している。
11月13日	予行練習（シミュレーション）	それぞれ生徒役、ファシリテーター役に分かれ、タイムテーブルの内容に基づき行った。ただし、時間は短く設定している。当日の動き方、進め方を実際に行うことで、細かい点での修正を重ねた。

【タイムテーブル】

	内容	生徒の活動	ファシリテーターの動き	使用教材
導入 (5分)	前回授業内容の振り返り、参政権（基本的人権）及び納税（義務）について復習	参政権の請願について学習することを確認。国民の義務についても触れる。	教員が利害の調整について述べる。→身の回りで困っていることについて考えておく。	PC、プロジェクタ
展開① (10分)	高校生がどのような課題を考えているのか、具体的な事例を挙げる。	昨年度に行った同様の企画にて取り上げられた課題を参考に、身の回りの課題について考える。	昨年度の課題内容についてパワーポイントを用いて説明。	
展開② (25分)	生活の中で「もっとこうなるといいな」ということを記録	付箋を用い、左記の課題を記録する。	机間指導。手が止まっている生徒に声をかけていく。	ふせん、タイマー
展開③ (15分)	個人が出した課題についてグループで整理	グループ内で話し合い、大項目に分類（仕事、学校など）し、付箋を用紙に貼る。	机間指導。話し合いが始まらないグループ、行き詰っているグループなどに声をかける。	A3用紙
展開④ (15分)	各グループで出てきた内容を発表し、全体シェア	付箋を分類した用紙を全体に示しつつ発表。	生徒の発表をPC入力。リアルタイムで生徒の言葉を文字化。	PC
展開⑤ (12分)	発表内容に対するグループでの話し合い	全体シェア終了後、他グループの意見の中で共感できたものを話し合い、ホワイトボードに記入。	机間指導。展開③に同じ。	ホワイトボード、マーカー（いずれも一橋高校の備品）
まとめ (残り時間)	本時のまとめ、意見共有、次回予告		次回（本時以降、の同じテーマの授業及び次のテーマの授業）に向け、課題解決の方法を考える。	

【詳細】

- ・ 授業の記録として、昨年同様ビデオカメラを用いた。ただし、ゼミ担当教員が参加できなかった回についてはその限りではない。
- ・ 昨年度は3回だった実施回数が倍ほどに伸びた。ただし、参加人数にはばらつきが出た。これは、3部に相当する授業は遅い時刻で実施されたからであろう。
- ・ ふせんは、かけた枚数を0.5点とし、平常点に加えるとした。これにより、生徒のモチベーションが大きく上がった。

2 結果・意義・所見

本企画は、一昨年、昨年と続けられた企画である。一貫して、一橋高校公民科における、主権者教育の体験型授業として、学生がファシリテーターとして授業に参加し、グループワークなどをメインに授業を進めるプログラム型授業を実践してきた。今年度は春学期のかなり早い段階で3年が主体となり、テーマはそのままに、新しい授業について考案した。それが、紙のパワーポイント、紙ポを用い、より意見発信に重点を置いたものであった。残念ながら、この紙ポを使用する案は夏休みの話し合いの段

階でボツになったが、すくなくとも、これまでの授業内容を鵜呑みにし、全く同じ授業でいいと考えることはなかった。このように、これまでの企画内容に疑問を持って当たることで、最終的に決定したタイムテーブルにおいても多面的な視点をもって授業を進めていくことができたと考える。以下、今回の企画に参加したゼミ生の意見を一部抜粋する。

【実施前の成果と課題】

- ・ 予行練習でゼミ生は全員生徒役になるべきであると感じた。生徒役になることで、ファシリがどのような役割を果たすのか実感することができる。(具体的に、自分はこのようなことを書いた、という声かけを本番ですることができる。)
- ・ 実際に生徒役になってワークを体験してみると、「急に知らない人が来て声をかけられてもしゃべる気になれない」感がわかった。ゼミ生は名札を用意したり、一言目を特に気かけたりする必要がある、と新たな気づきがあった。小さな発見があるので、リハーサルは継続して行いたいと思う。
- ・ 今年は研究授業ということもあり難しかったと思うが、学サポ申請書の内容もゼミ生で熟考したものなので、それを活かした授業作りをしたい。その為には、もっと早い段階での高校側との連携が必要であると考え。
- ・ 授業内容を練ることに加えて、よりリアルなシミュレーションが必要。他のゼミに協力して貰ったり、ブリワンの場を借りたりできたら好ましい。今年より早い段階で一度デモンストレーションを行えたら、より多くの気づきを得ることができはずだ。

【授業内容についての成果と課題】

- ・ “千葉県のバイトの時給が安すぎるから改善したい”という意見に対しては、「どうして東京と比べて千葉は安いのか？」という疑問がでた。このように、興味関心から広がる学習が生まれ、ここに、シティズンシップ教育の意義が見いだせる。
- ・ 生徒が「困っていること」として挙げるものは、学校生活のことが多い。しかしあくまで主権者教育であるため、政治・地域・労働などにも目を向けられる働きかけ(授業内容、ファシリテーター含め)が必要である。
- ・ (ふせんに課題を書き出す、解決方法について考える、Twitterで発信するという3段階の授業構成は)各段階の授業において、自ら課題を提示、選択することが求められる。/自らの生活全般(地域社会や日々の授業)に対して、主体性を獲得するきっかけを育んでいると考えられる。
- ・ (座席の向きが課題)生徒によっては黒板・スクリーンが後ろになることもあり、見づらい場面が多く、そうした生徒は実施内容への理解の遅れが多かった。パワーポイントを用いる場面が多かったからこそ、全員が見やすい配置にすることが望ましい。
- ・ 席が奥の子の回答がなかなか見えない。(研究授業なので仕方ないが)見回っている大人が多すぎた。
- ・ 全く発言しない生徒に対してどのように接するのかについては今後考えるべき問題だ。

【主権者教育を行うことの重要性】

- ・ 高校生は就職、進学とそれまでの人生の中でも大きな進路選択が行われる。将来の人生設計を行う上で、学生としての感覚と社会人としての感覚が乖離してしまう状況は、望ましくない選択が行われてしまう可能性が高い。社会への関心、興味を持つことの

発端として、高校生への主権者教育が意味を持つ。

【まとめ】

全体として、グループワークメインの「プロジェクト型授業」の実践はできたと考える。ふせんを用いたことで、意見や発言が増え、その後のグループワークもスムーズに行うことができた。担当した高校教員も「意外な生徒から発言が出てきた」と、普段の黒板を用いた講義形式である「プログラム型」授業では成果が発揮されにくい生徒を教員に評価させることにもつながった。

授業内容は一昨年から変わらず「主権者教育（シティズンシップ教育）」を扱っている。一橋高校は定時制であり、様々な環境に置かれた生徒が通う学校である。そんな中で、「主権者であることを認識するために模擬投票を行う」などといったこれまでのようなありきたりな授業は通用しない。国政選挙での選挙権を持たない生徒も在籍するからである。加えて、学習障害などを抱えている、あるいは日本語を母語としないために、堅苦しい用語ばかり用いた講義のみでは生徒の理解につながりにくいのだ。そのような生徒も含め、「主権者教育」という堅苦しいテーマを身近に感じてもらうためには、「プログラム型授業」の実践が必須であると考えられる。

一方で、改善点も挙げられる。1点目は、授業案骨子をかなり早い段階で作成していたが、授業担当教員とうまく連携がとれて

おらず、骨子案のメインであった「発表」に重点を置いた授業が採用されなかった点だ。今年度は担当教員が本授業を研究授業に取り上げたために（勿論大変栄誉なことではあるが）、ゼミ生は教員の授業案に対し新たな提案や改善点について言及するのみにとどまった。3年で作成した骨子はそれなりに時間をかけて作ったものであったため、来年度以降は春学期の段階で一橋高校教員と連携しながら新しい授業について模索したい。2点目は、ファシリテーターの技量を上げる必要があるという点だ。テーマを「身近な課題」に設定したために、意見は出やすくなったがテーマからそれたものも見受けられた。また、一定数、全く自分の意見を書けない、ファシリテーターが話しかけても黙り込んでしまう生徒もいる。このような生徒たちに対し、どのようにアプローチしていくかは個人の技量にゆだねられていた。しかしシミュレーションを重ね、前年の映像などを参考に効果的なアプローチの方法を考えることはできたであろう。授業としては「うまくいった」とは高校教員の認識であるが、細かい点において、改善すべき点は多く見つかる。

以上、実績について報告した。主権者教育自体、まだまだ発展の途中であり、同様にこの企画も改善、発展の余地を多くある。今回の企画が、一昨年、昨年の企画と同様、主権者教育の発展に寄与したと信じ、この報告を終える。

離島の小、中学校における学習支援プログラム

代表者：遠藤ゼミ 西島美紗

1 実施概要

調査

東京都大島町の小・中学校にて、学習支援のボランティア活動を中心としたフィールドワーク調査を行い、報告書にまとめた。対象施設は、大島町立さくら小学校、大島町立第二中学校である。

事前打ち合わせ

日程 2018年 7月 30日

- ・ 同行する青山学院大学の学生と打ち合わせを行った。
- ・ 役割の分担、研究計画を立てた。

第一回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程 2018年 8月 27日～29日

- ・ 大島町の小・中学校へのフィールドワーク調査

8月 27日

現地にてボランティア活動の準備及び最終確認

8月 28日

大島町立さくら小学校 フィールドワーク調査

大島町立第二中学校 フィールドワーク調査

8月 29日

大島町立さくら小学校 フィールドワーク調査

大島町立第二中学校 フィールドワーク

第二回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程 2018年 11月 19日

- ・ 大島町の中学校へのフィールドワーク調査

11月 19日

大島町立第二中学校 フィールドワーク調査、校長先生へのヒアリング調査

調査担当

- ・ 大島町立さくら小学校

栗田侑果

渡辺日南子

俣野夏希

- ・ 大島町立第二中学校

中村海友

川島健祐

佐藤嵩至

渡邊翼

山下早苗

研究テーマについての検討会を実施

日程 2018年 10月 17日

- ・ 研究テーマの妥当性について全員で検討会を行った。

報告書作成

日程 2018年 10月 17日～2019年 1月 23日

2018年10月17日～2019年1月21日

- ・ 初回の検討会以降、長期にわたって4、5回のメール検討会を実施した。
- ・ フィールドワークで得たデータを各々で分析・考察し、一つの報告書としてまとめた。

1月23日

- ・ 報告書の刊行

その他

- ・ 報告書作成までに、各々で必要がある場合、文献調査を行った。

2 結果・意義・所見

離島の小・中学校へ学習支援ボランティアを中心としたフィールドワーク調査を行った。そして、そのなかでの関わりから、各々が気になった子どもたちについて、行動や表情について分析・考察し、報告書にまとめた。

調査は2回行った。第一回調査では、大島町立さくら小学校と大島町立第二中学校の夏休み期間を利用して行われる水泳指導の監視・補助や補講授業のサポートを行った。第二回調査では、第二中学校へ普段の授業の見学等を中心としたフィールドワーク調査、校長先生へのヒアリング調査を行った。

調査から、子どもたちについての学力、先生方との接し方、卒業後の進路といった情報を得た。その後、得られたデータをもとに、子どもたちの行動や表情、会話の内容等を分析・考察し報告書にまとめた。データを考察していく際には、離島という環境であることを踏まえ、その良い面や問題点を指摘した。また、島という普段は接する機会のない環境で暮らす子どもたちや教育現場に向き合う中で、学生がどのような気

づきを得られたのかについても併せて考察した。

今後、作成した報告書が、大島や大島のような教育現場にいる指導者の方々にとって一助になることを期待している。以下はフィールドワークで得られたデータとその考察の一部である。

離島という環境の中で暮らす子どもたち

- ・ 子どもたちの様子

ボランティア活動の中で関わった子どもたちは、そのほとんどが大学生と初対面であった。最初は緊張した様子が見られたものの、あいさつや軽いコミュニケーションであれば、子どもたちのほとんどが問題なくこなせていた。なかには数時間かかわっただけで大学生に寄ってくる子どもも見られた。

このような人懐こさは東京ではあまり見ることが出来ない。離島という環境が大きな要因と考えられる。狭いコミュニティの中で、大人や友人とのコミュニケーションを覚えていくことが出来ているのではないだろうか。

- ・ 先生方と子どもたちの接し方

大島では子どもの人口が少なく、訪問したさくら小学校の全校生徒は100人前後、第二中学校は70人前後である。大島の先生方はこの環境を利用しながら、授業中や普段の子どもたちと接しているように思えた。例えば、授業中の先生方と子どもたちのかかわりを見てみると、先生が子どもたち一人ひとりの授業への理解度や課題の進捗状況などを気にかける様子が見られた。都心で見られる40人程度のクラス規模であれば、子どもたち全員の理解度を把握するのは、教員に非常に負担がかかる。しかし、島という人口が少ない環境で、クラス規模も都心の半分程度であるという環境だからこそ、

子どもたち一人ひとりに手厚い学習指導ができるのだと考えられる。また授業外のかかわりのなかでは、学校を卒業していたり、これから入学してくるきょうだいの様子についても、先生方が把握しようとする姿勢が会話等から感じられた。きょう代いは子どもに対して、様々な側面で影響を与える要因でもある。きょうだいなどの身近な他者の様子は、その子どもへの教育を支える重要な情報となるだろう。そしてそうした情報をしっかりと得ることができ、かつ活用できる環境というのは島などの人口が少ない地域特有の子どもたちとのかかわりなのではないだろうか。

・学力差について

大島では小学校から高校まで、ほぼ全員が同じ進路をたどる。都心のように卒業のタイミングで受験という選択肢はあまりとられない。唯一の受験のタイミングである高校受験も、受験者数が島内の公立高校の定員に満たなければ全員合格となる。一般的には、受験によって学力はある程度までそろえることが出来るが、大島ではそのような受験の機能はほとんどなくなってしまっている。つまり、学校内での学力差の問題は顕著に見られるのである。理解の早い子どもも、授業に追いつけない子どもも同じ授業を受けている。

このような現状の改善策として、例えば第二中学校では非常勤の教員による個別指導を実現させている。授業に追いつけない子どもに対して、授業外の補講のほか、非常勤教諭が勤務している日には、授業中も学習支援を受けることが出来るこうした取り組みは、支援が受けられる施設がない島ならではの工夫された教育の在り方といえるのではないだろうか。大島は受験が無いに等しい状況のため、学習意欲の低下が生じているということは以前から指摘されて

いる。授業に追いつけない子どもを支援することは、こうした問題にも間接的にも影響を与え、良い方向へと問題を改善していく取り組みなのではないかと考えられる。

・離島の子どもたちの卒業後の進路

大島の子どもたちは高校まではほぼ同じ進路をたどるが、大学は島内にないため、進学する場合は東京に出てこなければならない。また就職という選択肢をとることになっても東京に出てくる場合が多い。つまり若い世代が島内に残らないことが、島全体が抱える問題となっている。教育という将来への投資をしたとしても、卒業したら島からいなくなってしまうため還元されないという状況が続いてしまっているのである。その結果、産業の衰退や高齢化の問題が生じてしまっている。この問題には様々な要因が絡み合っており、個人の生き方も視野に入れなければいけないため、解決は非常に難しい。しかし、島の教育の在り方を考えていく上で、避けては通れない問題であることは確かである。

・本企画の目的とその結果

本企画は離島の小・中学校を対象とする、学習支援ボランティアを中心としたフィールドワークであった。意義として事前に挙げられていたことは、①離島の子どもたちの学習意欲の低下の改善、②大学生は実際の教育現場に触れることで、これまで学んできた生涯学習の成果を生かすこと、である。①については、学習支援という形の中でも、「大学生」の姿を見せることが出来たことは、離島の子供たちにとって1つのロールモデルとなることが出来たのではないかと考える。その中で子どもたちがそれぞれに考え、将来の方向性を考えてくれば、学習意欲の低下の改善のきっかけになったのではないかと考える。しかし、関わっ

た期間が短いため短期的な成果はみられなかった。また授業のサポートという形でしか子どもたちとかがかわることが出来なかった。小・中学生が高校や大学をもっと知ることが出来るようなワークショップなどの時間があってもよかったのではないかと考える。②については、普段の生活ではほと

んど見ることが出来ない教育現場に触れることで、各々感じるものがあつたのではないかと考える。ゼミで学んでいた内容と実際の教育現場の間にあつた相違点を見出し、分析・考察を繰り返していくことで、これからのゼミ活動がより深みのある時間となっていくのではないかと考える。

地方に住む高校生を対象としたキャリア支援ボランティア

代表者：遠藤ゼミ 川島健祐

1 実施概要

経済的・地理的な理由等によってキャリア形成が固定化している懸念のある地方の高校生を対象に、彼らが自分のキャリアについて考えられる場を提供できるボランティアを実施し報告書にまとめた。対象施設は、富山県高岡市の私立高岡向陵高等学校である。

第一回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程：2018年10月5日

- ・私立高岡向陵高等学校にてワークショップの実施

10月4日

現地へ移動、その後ボランティア活動の準備及び最終確認

10月5日

私立高岡向陵高等学校 現地調査

第二回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程：2018年12月6日

- ・私立高岡向陵高等学校にてワークショップの実施

12月5日

現地へ移動、その後ボランティア活動の準備及び最終確認

12月6日

私立高岡向陵高等学校 現地調査

中間打ち合わせ (サポート・プログラム助成対象)

日程：2019年1月6日～8日

国立オリンピック記念青少年総合センター
第三回調査、第四回調査に向けた打ち合わせ

第三回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程：2019年1月25日

- ・私立高岡向陵高等学校にてワークショップの実施

1月24日

現地へ移動、その後ボランティア活動の準備及び最終確認

1月25日

私立高岡向陵高等学校 現地調査

第四回調査 (サポート・プログラム助成対象)

日程：2019年2月11日～13日

- ・私立高岡向陵高等学校にてワークショップの実施

2月11日

現地へ移動、その後ボランティア活動の準備及び最終確認

2月12日

私立高岡向陵高等学校 現地調査

2月13日

私立高岡向陵高等学校 現地調査

調査担当 (全：高岡向陵高等学校)

小川莉奈、似内未来、大川拓海、西島美紗、田嶋柚里、大久保遥、古宿伶奈、藤原和、林愛理紗、籠宮汐海

報告書作成

日程：2018年12月21日（第一回調査・第二回調査）

日程：2019年2月1日（第三回調査）

日程：2019年2月20日（第四回調査）

現地調査にて得られたデータを、分析・考察し報告書としてまとめる。

その他

報告書作成にあたり、各自必要に応じて文献による調査を行った。

なお、申請書提出時に予定していた荒井学園 新川高等学校の要望により、同学校法人の高等学校に実施施設を変更している。それに伴い、実施スケジュールにも若干の変更を加えたが、企画自体の趣旨と目的に変更はない。

2 結果・意義・所見

富山県高岡市の私立高岡向陵高等学校にて、ワークショップや授業補助などを通じた現地調査を実施した。報告書は、段階的に実施したワークショップの内容や高校生の変化などを踏まえて作成する。

現地における調査は、合計で4回実施する。内容としては、2018年10月から2019年1月にかけて、計3回行った1日の短期調査と、2019年2月に大学の春期休業期間を利用した2日間にわたる調査を1回の、計4回である。短期調査では、大まかな授業見学と補助、

小規模なワークショップを実施した。2日間にわたる調査では、短期調査のときよりも授業に密着することと、規模の大きいワークショップの実施を予定している。いずれの調査においても、授業やワークショップなどを通して高校生との関わりを多く持つようにしている。

現在は短期調査を2回実施した状態である。ゆえに、本企画の実績としては、今までに実施した2回の調査報告から得られた調査対象校の現状に関する情報と、それを踏まえて現段階の実績と残りの調査においてどのようなことを心がけていくか、行っていくか、といった部分に関して報告する。

私立高岡向陵高等学校の生徒たち

調査対象校の生徒たちからは、比較的活発であるという印象を受けた。初めのうちは緊張もあったためか大人しい印象が強かったが、学生から話しかければ恥ずかしがるなどということはなく、明るく会話をしてくれた。また、今回関わった生徒たちから受けた印象に関して、ここでは「勉強について」と「将来について」の2つの視点から考察する。

第1に、「勉強について」の視点である。勉強に関しては、クラスによってやる気に差があるという印象を受けた。調査対象校は私立であることなどから、現地では受験の際にいわゆる「すべりどめ」として扱われることが多いため、本意な気持ちで入学を決定した生徒や、元々勉強があまり得意ではない生徒も多くいるようだ。ゆえに、「自分は勉強できないから」と笑っている様子や、勉強に対してやる気が出ず、だらけてしまっている様子も見受けられた。また、2つあるコースのうち、偏差値の低い方のコースに所属する生徒の方が勉強に対する姿勢がマイナス傾向にあることが明らかになった。

第2に、「将来について」の視点である。将来に関してもクラスによる差がみられた。先に述べたような勉強に対してやる気の出せていない生徒たちは、将来向かいたい進路が曖昧になってしまっている、という部分が勉強に対するやる気喪失の原因になっていると考えられる。また、2つのコースのうち偏差値の高いコースに所属する生徒の方が将来に関して考えられている傾向にあり、入学時から現在に至るまで、彼らは劣等感を抱いているのかもしれないと考えられる。

私立高岡向陵高等学校の様子・現状

高岡向陵高等学校では、「未来探求コース」（上記の高偏差値コース）と「未来デザインコース」（上記の低偏差値コース）の2つのコースに展開した教育が行なわれている。未来探求コースでは、フィールドワークや課題研究によって主体的な学びを身につける試みが実施されている。また普通の授業においてもそのような環境は整えられており、思考力・表現力・判断力の向上を目指した教育環境となっている。

一方、未来デザインコースでは、自身の進路に応じてカリキュラムを設定することができるため、キャリアアップを目指すことが可能である。また本コースでは、ミラiproジェクトという独自の授業が展開されている。これは自分の興味から課題を発見し、その改善に向けて取材や調査を行なうという実践的なプロジェクトとなっている。

高岡向陵高等学校における課題・改善点

現状、調査対象校において改善の求められる点は、2つに大別される。第1に、生徒間における学習意欲の差が大きいこと。第2に、生徒たちのキャリアサポートに重点を置いたプロジェクトや教育内容が、活かし

きれていない部分である。特に「学習意欲」に関する課題は、改善によってプロジェクトの効果にも大きな変化がもたらされると考えられるため、改善が強く求められるだろう。

本企画の目的と結果、及び今後について

本企画を立ち上げた背景は、地方の高校生には経済的・地理的な理由等によって、キャリア形成が固定化してしまっているのではないかと、という疑問があったからだ。ゆえに、本企画では、①自分のキャリアを考える場の提供、②高校生の将来像の具体化、③学生自身のこれまでの経験や知識を振り返る、以上の3つを目的としていた。

上記の目的の達成状況に関して、1つずつ考察する。初めに、「自分のキャリアを考える場の提供」については、概ね達成できていると考えられる。現段階では1日だけの短期調査の際に小規模なワークショップを行なっている程度に留まるが、生徒たちの様子を見る限り、僅かではあるかもしれないが心には響いているようである。

次に、「高校生の将来像の具体化」である。これに関しても、現段階で概ね達成できているのではないだろうか。地方の高校生にとって東京の大学に通う大学生というのはそれだけで珍しい存在らしいが、彼らは歳の離れた私たちに対してもフレンドリーな様子で接してくれている。そのため、ある1つのキャリアモデルとして生徒たちと接することができていると考えられるだろう。

最後に、「学生自身のこれまでの経験や知識を振り返る」ことである。これに関しては、未達成の部分が大きいと考えられる。現状、生徒たちと打ち解けることや、生徒たちを中心とした目的に注力している部分が大きいため、学生側の振り返りにまでは到達できていない。

以上を踏まえて、今後は①、②にあたる

目的をより達成すること、及び学生自身にも少しずつ焦点を当てていくことが必要である。そのためにも、残り2回の現地調査においては、各コースにおける教育の特徴を把握し、今までより一層、一人ひとりの生徒に焦点を当てた調査やワークショップを実施することを目指していく。さらには

学生自身への振り返りという点に関して、現地調査で得られたデータや経験を、より深く分析・考察していくことが必要である。そこで得られたものを活かすことにより、今後のゼミ活動もより意味のあるものへとなるのではないだろうか。